

仙台市文化財調査報告書第134集

仙台平野の遺跡群Ⅸ

—平成元年度発掘調査報告書—

1990年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第134集

仙台平野の遺跡群Ⅸ

——平成元年度発掘調査報告書——

1990年3月

仙台市教育委員会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手したのは、昭和56年でした。この事業も数えて9年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は陸奥国分寺七重塔跡南側の遺構確認調査を実施、本報告書はそれをまとめたものであります。

本市は平成元年4月に政令指定都市となり、今後は「仙台市総合計画2000」に基づいた都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められてきています。またそれに伴い民間の小規模開発も増え、「仙台平野の遺跡群」の調査に期待するところが大きいと言わざるを得ません。

開発の増加に伴い発掘調査量の増える中、われわれは先人の創造した歴史と文化遺産を次代に継承し、生活の中での活用を図っていかねばならないと考えます。しかし、こうした文化財の保護活用は市民の方々や有識者の御支援があってこそ、成果をあげられるものと思います。

仙台市も平成元年4月に政令指定都市となり、早や1年が過ぎようとしております。これからは、もっと広い視野に立って、「仙台平野の遺跡群」調査を行っていく必要があります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも、御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成2年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤 井 黎

例 言

1. 本書は平成元年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原：1973)を使用した。
3. 本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」の一部である。
4. 実測図中の水系高は標高で示してある。
5. 実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
6. 本書の作成については下記のとおり分担し、編集は斎野が行なった。
本文執筆 斎野裕彦
遺構図面整理・トレース 泉美恵子 斎野
遺物復原・実測・拓影 斎野 斎藤紀子 伊藤房江 村上令子 桜井幸子 永井孝仁 松本慎一 青山博樹
遺物写真撮影 高倉祐一 下山田俊之
図版組 斎野 泉 村上
7. 陸奥国分寺跡の遺構略号を次の通りとした。
SK 土坑 SX 性格不明遺構
8. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会で保管している。
9. 今年度の事業は平成元年11月に着手し、平成2年3月に終了した。

本文目次

序文

例言

I. 調査計画と実績	1
II. 発掘調査報告	3
陸奥国分寺跡	
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 調査経過	3
3. 調査内容	7
4. 考察とまとめ	48

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	4	第15図 平瓦実測図(1)	25
第2図 調査区位置図	5	第16図 平瓦実測図(2)	27
第3図 調査区北壁・西壁セクション図	8	第17図 平瓦実測図(3)	29
第4図 II層・III層上面平面図	9	第18図 平瓦拓影(1)	31
第5図 SK1・SK2 遺物出土状況平面図・エレベーション図	12	第19図 平瓦拓影(2)	32
第6図 SK1・SK2 平面図・セクション図	13	第20図 平瓦拓影(3)	33
第7図 SK3・SK4・SK5 平面図・セクション図	14	第21図 平瓦拓影(4)	34
第8図 SX1 平面図・セクション図	15	第22図 SK1・SK2・A-3G・A-4G・遺構外全平瓦組成図	39
第9図 須恵器実測図・拓影	16	第23図 面戸瓦実測図	41
第10図 軒丸瓦実測図	19	第24図 隅切り瓦実測図	42
第11図 軒丸瓦・軒平瓦実測図	20	第25図 熨斗瓦実測図	43
第12図 軒平瓦実測図	21	第26図 隅木蓋瓦実測図	44
第13図 丸瓦実測図	22	第27図 文字・記号瓦(1)	46
第14図 叩き目の種類	23	第28図 文字・記号瓦(2)	47
		第29図 陸奥国分尼寺跡出土遺物	49

挿 表 目 次

第1表	発掘調査実績表	2	第7表	面戸瓦観察表	43
第2表	軒丸瓦・軒平瓦出土数量表	18	第8表	隅切り瓦観察表	43
第3表	平瓦観察表	35	第9表	製斗瓦観察表	43
第4表	平瓦・丸瓦出土数量表	36	第10表	出土遺物数量表	45
第5表	SK1 平瓦類別数量表	38	第11表	平瓦類別対応表	51
第6表	SK2 平瓦類別数量表	38			

写 真 図 版 目 次

写真1	調整前風景(西方より)	55	写真18	SX 1 確認プラン(北方より)	60
写真2	調整区全景(1)(東方より)	55	写真19	SX 1 全景(北方より)	61
写真3	調整区全景(2)(北方より)	55	写真20	SX 1 セクション B・B'(西方より)	61
写真4	基本層序(A-4 G, 北壁)	56	写真21	作業風景(南方より)	61
写真5	SK 1, SK 2 確認プラン(西方より)	56	写真22	須恵器・軒丸瓦	62
写真6	SK 1 全景(西方より)	56	写真23	軒平瓦(1)	63
写真7	SK 1 瓦出土状況(西方より)	57	写真24	軒平瓦(2)	64
写真8	SK 1 セクション C-C'(北方より)	57	写真25	軒平瓦(3)・丸瓦	65
写真9	SK 2 全景(西方より)	57	写真26	平瓦(1)	66
写真10	SK 2 セクション C-C'(北方より)	58	写真27	平瓦(2)	67
写真11	SK 3 確認プラン(北方より)	58	写真28	平瓦(3)	68
写真12	SK 3 全景(北方より)	58	写真29	平瓦(4)	69
写真13	SK 3 セクション(南方より)	59	写真30	平瓦(5)	70
写真14	SK 4 確認プラン(北方より)	59	写真31	平瓦(6)	71
写真15	SK 4 全景(北方より)	59	写真32	面戸瓦	72
写真16	SK 5 全景(東方より)	60	写真33	隅切り瓦・製斗瓦	73
写真17	SK 5 セクション(東方より)	60	写真34	隅木蓋瓦・文字記号瓦(1)	74
			写真35	文字記号瓦(2)	75

I. 調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、昭和62年11月1日の宮城町との合併、及び昭和63年3月1日の泉市、秋保町との合併により、これまでの旧仙台市域の425箇所に新たに255箇所を加え、680箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。また、このような文化財保護の努力を続ける一方で、これらの文化遺産を学術研究の場にとどまらず、広く学校教育や社会教育の場、そして市民生活の中においても活用していく必要がある。しかし、ここ数年來の都市化に伴う公共事業や民間による開発行為の増加は、特に平野部において著しく、これらの遺跡の中にはそれによって破壊の危機にさらされているものも数多い。

当教育委員会では、これらの遺跡の範囲の確認と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受け「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。9年目をむかえた今年度は、陸奥国分寺跡の発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査計画と実績は以下の通りである。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査
2. 調査面積 288.5㎡
3. 調査期間 平成元年11月17日～12月27日
4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 早坂 春一

調査第一係

係長 佐藤 隆 主任 田中則和 木村浩二 主事 斎野裕彦 大江美智代

教諭 高倉祐一

調査第二係

係長 加藤正範

管理係

係長 稲田義幸 主事 白樺靖子 山口 宏 佐藤良文

調査参加者 青山博樹 赤井澤サダ子 安斎直子 泉美恵子 伊藤朋江 押切智紀 小畑勝子 海藤 浩 片根義幸 菊池文昭 斎藤紀子 佐々木義昭 桜井幸子 菅井

美枝子 高橋秀幸 田中一史 田中さと子 谷藤恵子 永井考仁 永坂宏樹
 永野泰治 松本慎一 松田 稔 三浦市子 峯岸安好 村上令子 山田やす子
 吉田アキヨ

5. 発掘調査に際して、下記の方々から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

- 工藤雅樹 (福島大学)
- 桑原滋郎 (宮城県多賀城跡調査研究所)
- 佐川正敏 (奈良国立文化財研究所)
- 進藤秋輝 (宮城県教育庁文化財保護課)
- 鈴木嘉吉 (奈良国立文化財研究所)
- 高野芳宏 (宮城県多賀城跡調査研究所)
- 辻 秀人 (福島県立博物館)
- 丹羽 茂 (宮城県多賀城跡調査研究所)
- 古川雅清 (宮城県多賀城跡調査研究所)
- 結城慎一 (仙台市博物館)
- 渡邊泰伸 (仙台育英学園高校)

第1表 発掘調査実績表

遺跡名	所在地	申請書	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
陸奥国分寺跡	仙台若林区 木下三丁目76	——	遺構確認調査	288.5m ²	288.5m ²	平成元年11月17日 ～12月27日

II. 発掘調査報告

陸奥国分寺跡

1. 遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は仙台市東部の仙台市木ノ下二丁目、三丁目に所在し、JR 仙台駅の東南東約2 km の位置にある。本遺跡の西側には仙台市長町より宮城郡利府町にのびる南西から北東方向の長町－利府線とよばれる地質構造線があり、南東側の海岸低地（宮城野海岸平野）と北西側の段丘・丘陵部との地形境界をなしている。本遺跡は長町－利府線の北西側の中町段丘の延長部分にあたるが、地形的には宮城野海岸平野の西端部に位置する。標高は15 m から17 m で、北西から南東へ向かって徐々に低くなっている。陸奥国分寺跡の東方約600 m には陸奥国分尼寺跡があり、北東約9.5 km には陸奥国府多賀城跡及び多賀城廃寺跡がある。また陸奥国分寺跡を含むこれらの遺跡に瓦を供給した台の原、小田原窯跡群は北方約3 km にある。

昭和43年度以来、当教育委員会は国の補助を受け、土地の買収を行ない環境整備を進めているが、昭和10年代からの宅地化によって、陸奥国分寺跡の北半部は宅地となっている部分が多い。

2. 調査経過

仙台市教育委員会では昭和43年度から土地の買収に着手して、陸奥国分寺跡の保護をはかってきた。また昭和47年度からは地下の遺構を地上に復元するなどの環境整備事業を実施している。整備事業にあたっては、復元設計の基礎資料を得るため、随時遺構の確認調査を実施してきているが、本年度は塔跡南地区の遺構確認調査を行なった。

塔跡南地区の調査は平成元年11月17日に調査を開始し、同年12月27日に調査を終了した。調査区は、塔跡廻廊南辺から南へ約30 m の地点に、第2岡のようにL字形に設定した。調査区の面積は288.5 m²である。調査区北西コーナー付近の任意の点を原点（N-O-S, W-O-E）とし、ここから調査区の方に合わせて基準線を設け、これをもとに調査区内に5 m×5 m のグリッドを設定して遺構実測を行なった。測量基準線の方向は磁北に対してN-1°-Eである。

註

及川 格 1988「1. 遺跡の位置と環境」『仙台平野の遺跡群Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第111集を転載



- | | | | | |
|-------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 陸奥国分寺跡 | 2. 陸奥国分形寺跡 | 3. 五本松遺跡 | 4. 南光沢薬跡 | 5. 与兵衛沼薬跡 |
| 6. 橋江遺跡 | 7. 二ノ森遺跡 | 8. 神明社高遺跡 | 9. 神明社宮跡 | 10. 土手前薬跡 |
| 11. 安養寺下薬跡 | 12. 大蓮寺薬跡 | 13. 寒内古墳 | 14. 尊徳寺横穴群 | 15. 蒸沢遺跡 |
| 16. 小柳城跡 | 17. 愛宕山横穴群 | 18. 大年寺山横穴群 | 19. 宗禪寺横穴群 | 20. 渡ノ崎城跡 |
| 21. 兜塚古墳 | 22. 法御塚古墳 | 23. 若林城跡 | 24. 南小泉遺跡 | 25. 遠見塚古墳 |
| 26. 仙台東郊桑里跡 | 27. 富沢遺跡 | 28. 泉崎浦遺跡 | 29. 西台遺薬跡 | 30. 郡山遺跡 |
| 31. 北目城跡 | | | | |

第1図 周辺の遺跡

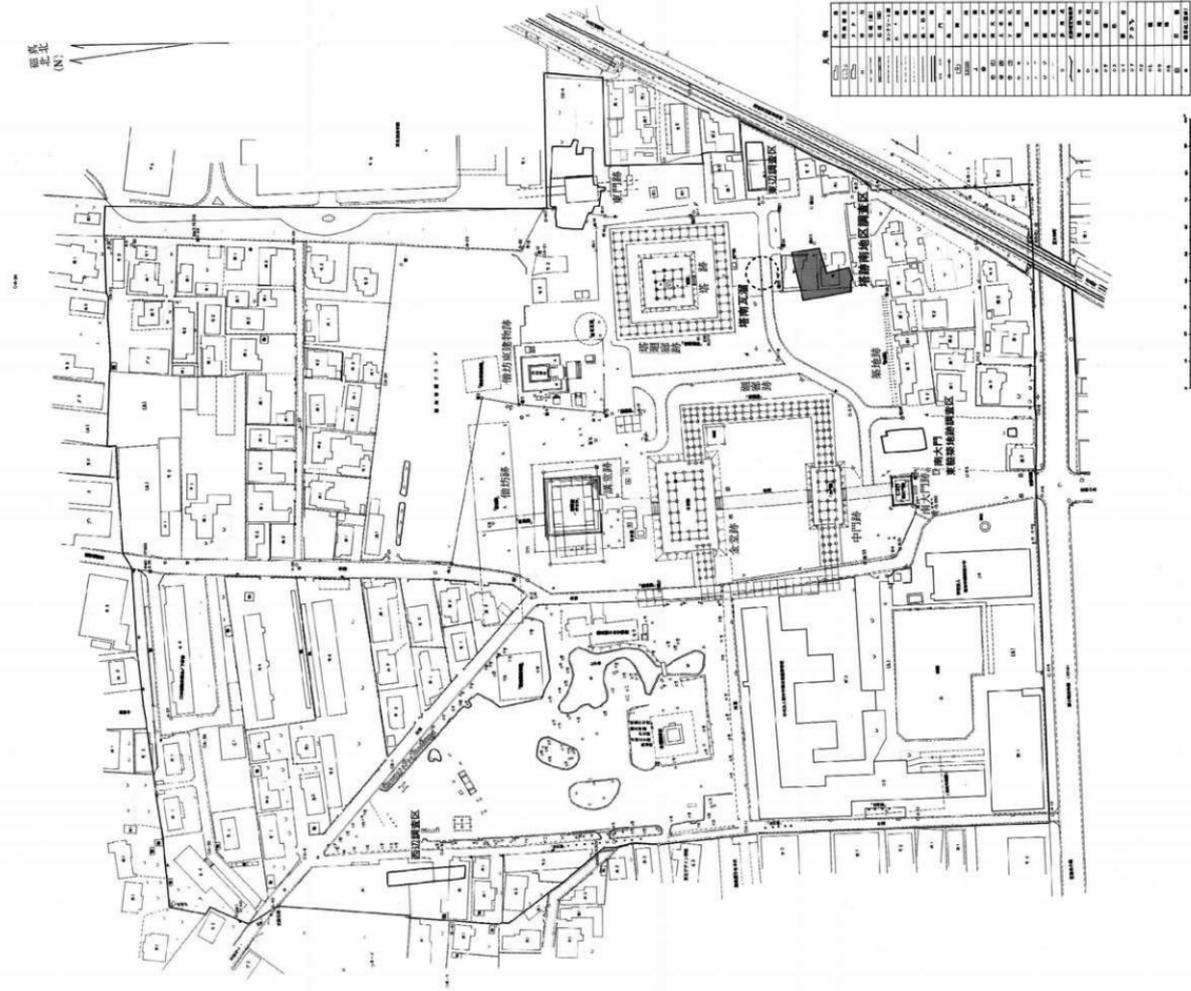


图 2-10 调查区总平面图

3. 調査内容

1. 基本層序

今回の調査区は、買収以前には宅地となっていた箇所であり、その際になされたと思われる整地層、盛土が確認された。また、この地区は、昭和30年～34年に行なわれた調査で確認された塔南瓦溜の南側に隣接する位置にあたる。

基本層序は、大別3層に分けることができる(第3図)。第I層は暗褐色(10YR 3/3)を呈するシルトで主にA・B-2～4グリットに分布する。層厚は8～20 cmである。第II層は濃い黄褐色(10YR 5/4)を呈する粘土質シルトで、調査区全域を分布する。また、北壁セクションでもみられるように黒褐色土をブロック状に含む部分があり、これをII'層とした。第III層は砂礫層である。主にA-1～3グリットに分布する。この砂礫層は、東辺の調査(昭和62年:当調査区東方約40 mの地点)及び南大門跡東脇築地跡の調査(昭和58年:当調査区南西方約60 mの地点)において確認された砂礫層と同一層と推定される。砂礫層上面の標高は、東辺の調査で13.2 m、南大門跡東脇築地跡で14.4 mより低く、今回の調査では14.4～14.8 mで、部分的な分布を示していることから、その上面は比較的起伏のある地形面となっていることが想定される。また、この砂礫層は中町段丘の段丘礫層と連続するものと考えられており、第II層には降下火山灰の可能性もある。

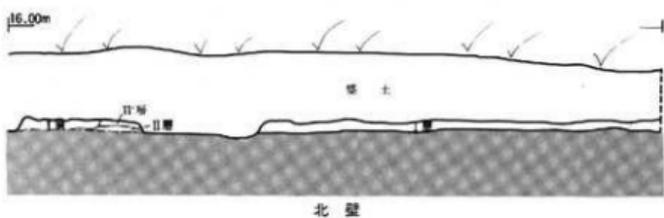
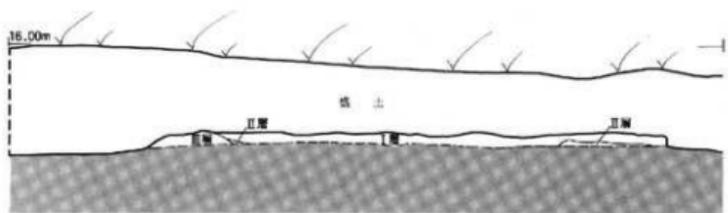
2. 検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、土坑5基、性格不明遺構1基である。遺構検出面はII層及びIII層上面である。

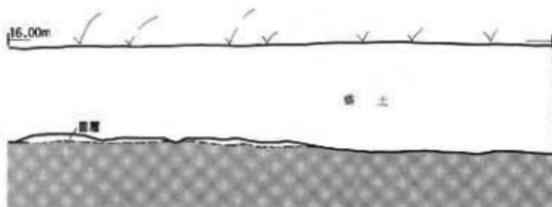
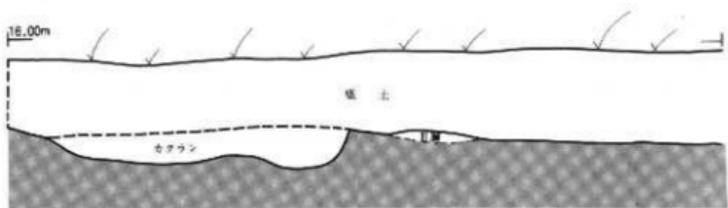
SK1:C-2グリットに位置する。II層上面で検出された。SK2と重複関係にあり、SK1はSK2より古い。全容は不明だが、平面形は不整形を呈するものと考えられる。上端南北幅222 cm、上端東西長252 cm以上、深さ17 cmである。底面はほぼ平坦であるが北側にはやや起伏がある。また、ピットが1基認められ、平面形は不整形円形を呈し、上端長軸99 cm、上端短軸65 cm、深さ10 cmを測る。埋土は2層である。

遺物は埋土1層中より瓦破片が142点、土師器破片1点が出土しており、その大半は1層上部である。底面からの出土遺物はない。遺物は遺構中央部から集中して出土している。瓦の内容は、平瓦破片が91点、丸瓦破片が50点(第13図1・2)、面戸瓦1点(第23図2)である。平瓦はIA類59点(第19図1)、IB類8点、IC類5点(第16図3)、VI類6点、分類不可13点である。第16図3はSK2から出土した平瓦破片と接合したものである。

SK2:C-2グリットに位置する。II層上面で検出された。SK1と重複関係にあり、SK2はSK1より新しい。平面形は隅丸方形である。上端東西長175 cm、上端南北長160 cm、深さ56 cmを測る。底面はほぼ平坦である。またピットが1基が認められ、平面形は不整形円形を呈し、



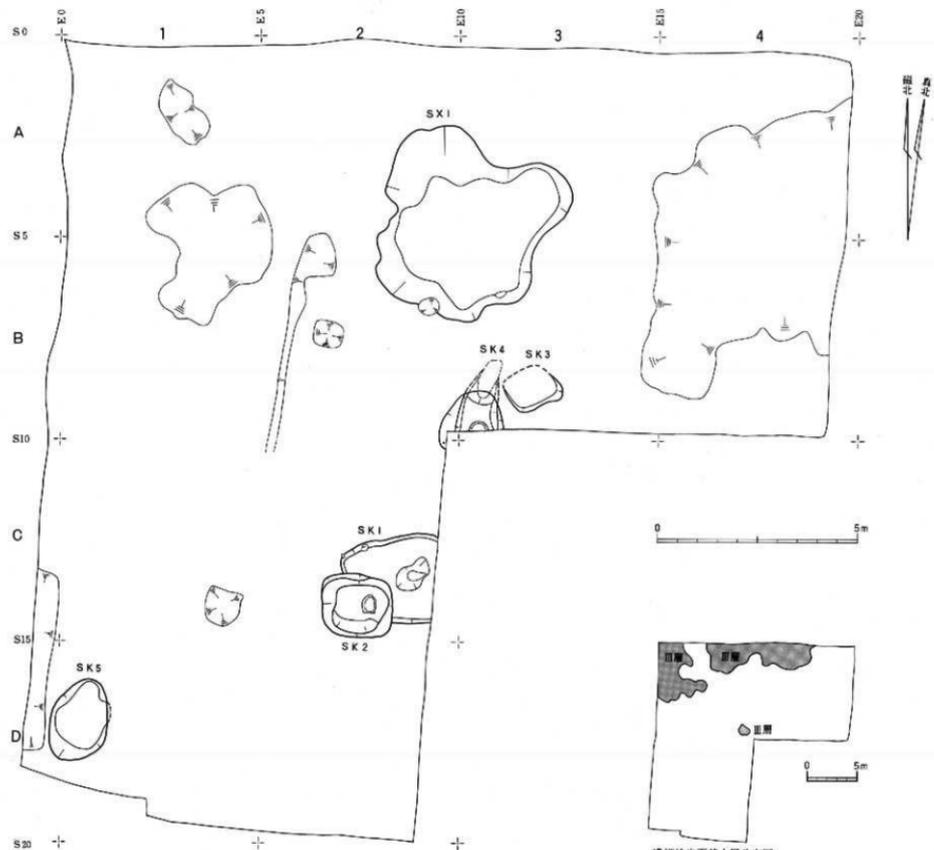
北壁



西壁



第3図 調査区北壁・西壁セクション図



第4圖 II層・III層上面平面圖 遺構検出面基本層分布図

上端長軸46 cm、上端短軸37 cm、深さ42 cmを測る。埋土は1層である。

遺物は埋土中より瓦破片141点、須恵器破片1点(第9図2)、土師器破片3点が出土している。底面からは瓦破片が4点出土している。瓦の内容は、平瓦破片が102点、丸瓦破片が39点(第13図3)、面戸瓦1点、隅切り瓦1点(第24図2)である。平瓦はIA類55点(第15図1、第18図3)、IB類6点、IC類10点(第16図3・第19図6)、ID類4点(第21図2)、III類8点(第20図5)、VI類9点、分類不可10点である。第13図3の丸瓦破片には軒丸瓦の丸瓦部の可能性がある。

SK 3 : B 3グリットに位置する。II層上面で検出された。北半部は残存していないが、平面形は楕円形を呈するものと考えられる。上端東西長146 cm、上端南北幅112 cm以上、深さ7 cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は1層であり、礫を多量に含む。

遺物は埋土上部より平瓦破片16点、丸瓦破片12点が出土している。平瓦はIB類3点、IC類3点、IV A類4点、V A類2点、V B類1点である。

SK 4 : B・C-2・3グリットに位置する。II層上面で検出された。全容は不明であるが、平面形は不整形を呈するものと考えられる。上端東西長165 cm、上端南北長101 cm以上、深さ91 cmを測る。北方へオーバーハングしており、底面はほぼ平坦であるが、南北に細長く、段を有する。また底面にはビット1基が認められ、平面形は円形を呈するものと考えられ、上端東西長46 cm、深さ12 cmを測る。埋土は3層である。

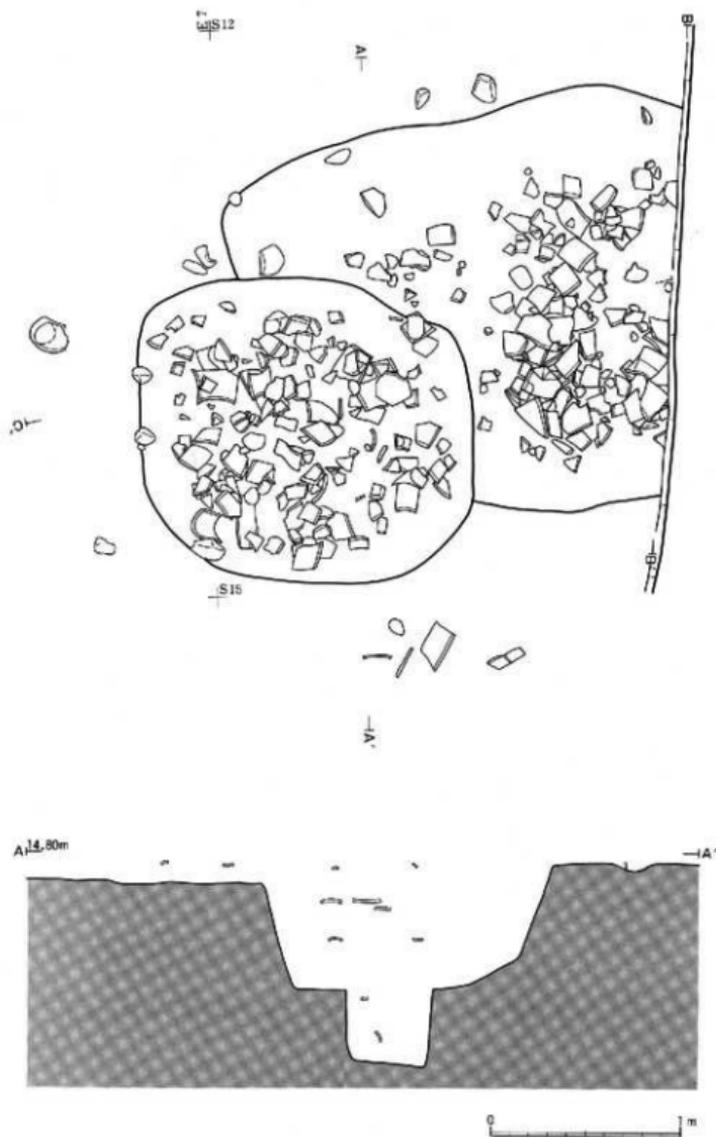
遺物は埋土中より平瓦破片15点、丸瓦破片9点、面戸瓦1点(第23図4)が出土している。平瓦はIA類1点、IB類2点、IC類6点、III類1点、IV A類1点、V A類1点、V B類1点、VI類2点である。

SK 5 : D-1グリットに位置する。II層上面で検出された。平面形は楕円形を呈する。上端長軸長215 cm、上端短軸長153 cm、深さ63 cmを測る。東側の一部がオーバーハングしている。底面はほぼ平坦である。埋土は1層である。

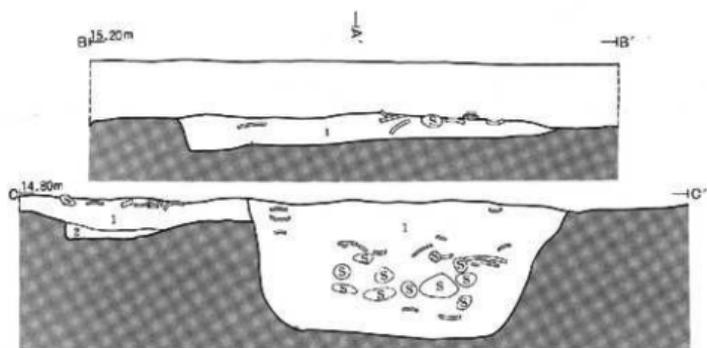
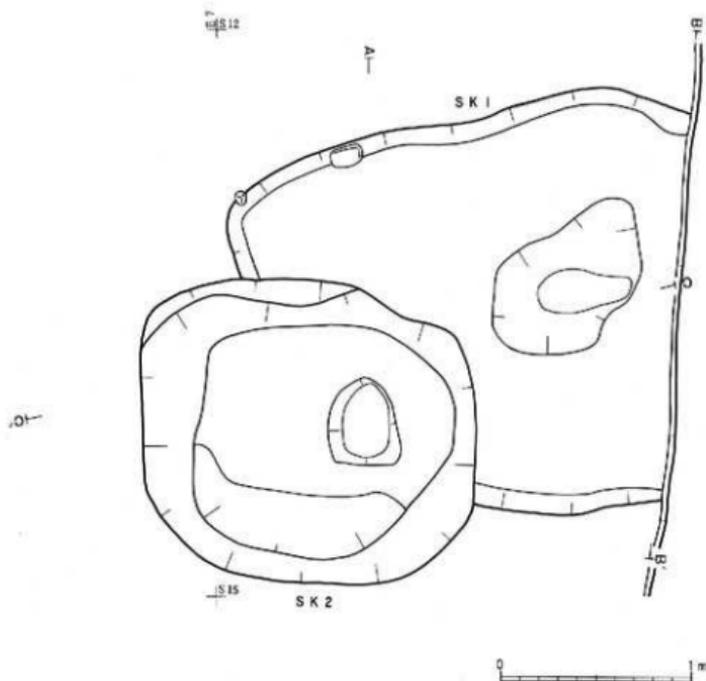
遺物は埋土上部から瓦破片が出土したが、上半部の攪乱部分からの出土遺物と区別することが困難であったため、それらはD-1グリット出土遺物とした。

SK 1 : A・B-2・3グリットに位置する。II層上面で検出された。平面形は不整形を呈する。上端長軸4.99 m、短軸4.88 m、下端長軸4.14 m、短軸3.26 m、深さ14 cmを測る。照面の立ち上がりは緩やかである。底面にはやや凹凸がある。埋土は2層であり、下層は極めてよくしまっている。

遺物は平瓦破片1点(V B類)、丸瓦破片3点が出土している。



第5図 SK 1・SK 2遺物出土状況平面図・エレベーション図



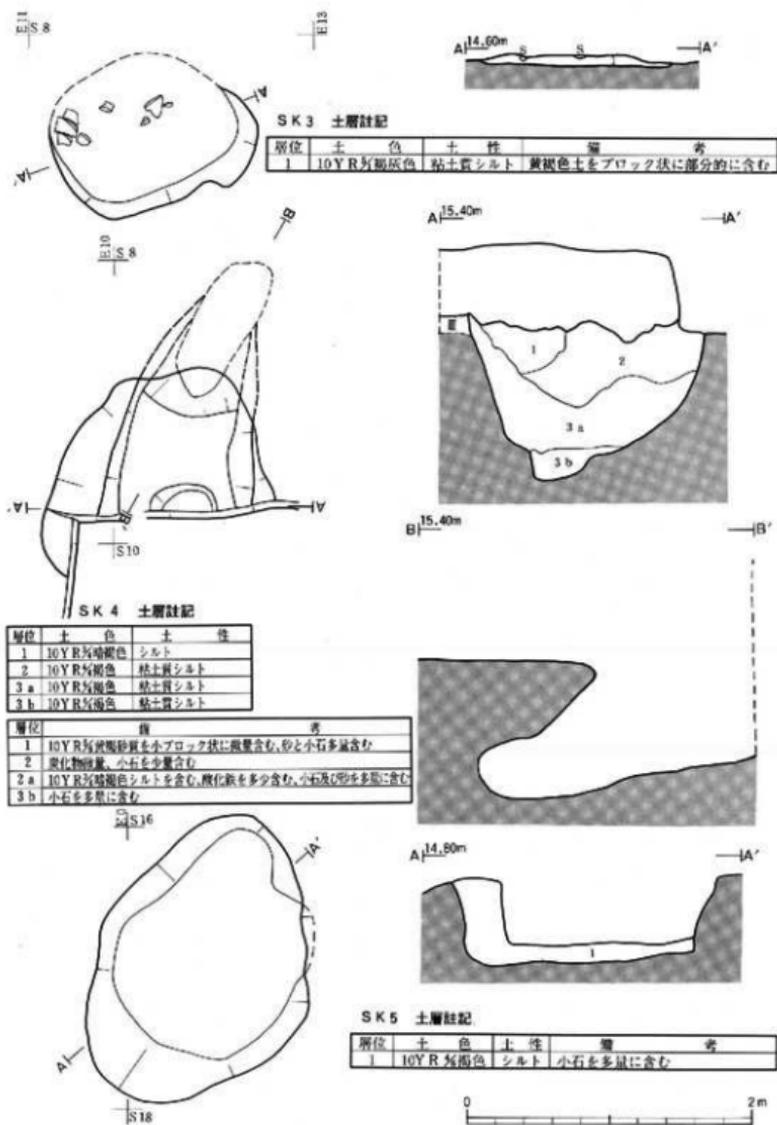
SK 1 土層柱記

層位	土色	土性	備	考
1	10 Y R 灰褐色	粘土質シルト	マンガン線を含む、10 Y R 灰褐色粘土質シルトを多少含む	
2	10 Y R 灰暗褐色	粘土質シルト	マンガン線を多少含む、10 Y R 灰に赤い黄褐色粘土を小ブロック状に少量含む	

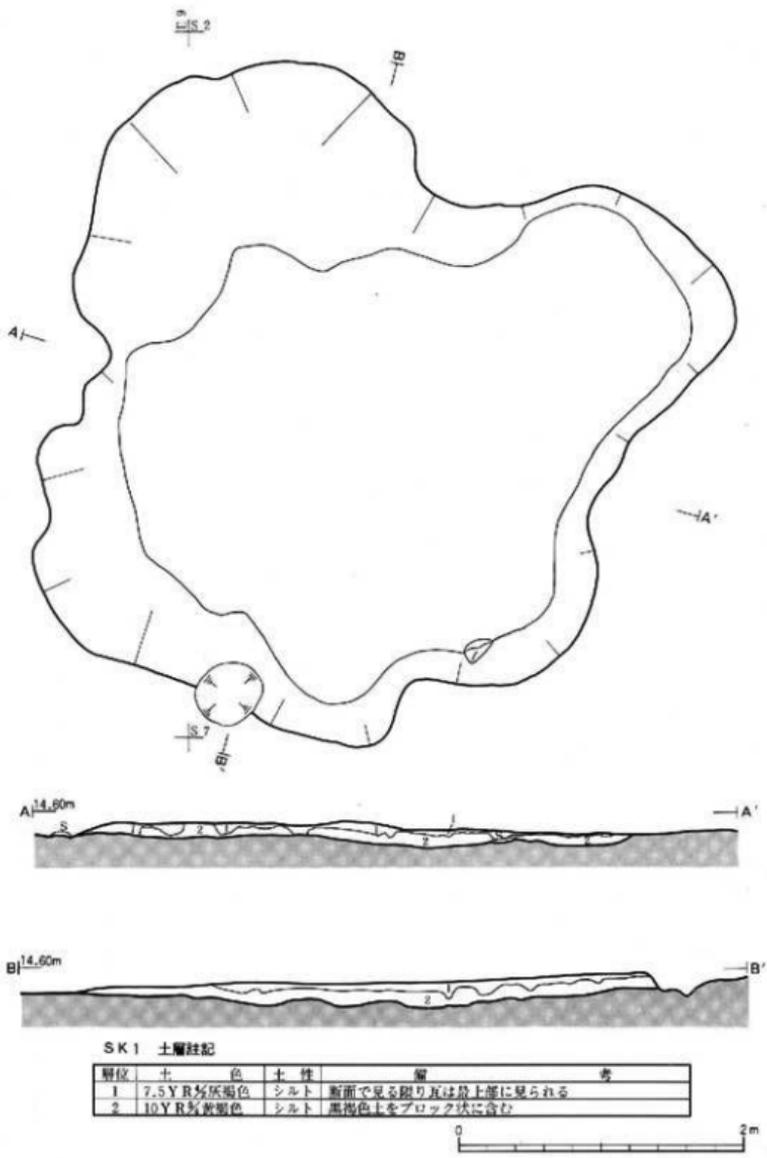
SK 2 土層柱記

層位	土色	土性	備	考
1	10 Y R 灰暗褐色	シルト	10 Y R 灰褐色シルトをブロック状に少量含む、礫木以上の円礫を含む、小石を少量に含む	

第6図 SK 1・SK 2平面図・セクション図



第7図 SK 3、SK 4、SK 5 平面図・セクション図



第8図 SX1平面図・セクション図

3. 出土遺物

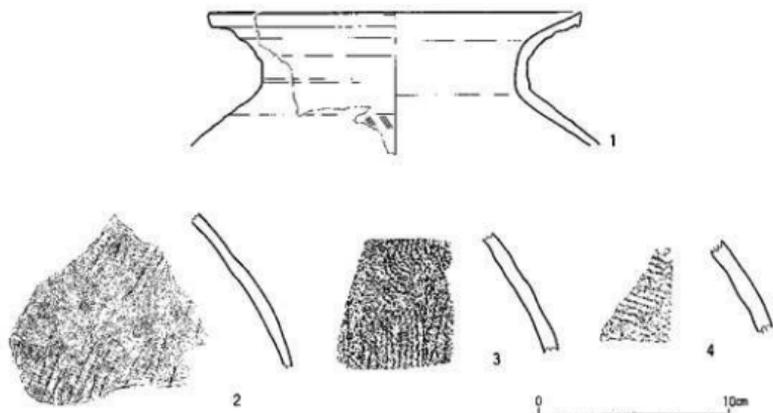
今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、瓦等である。遺物のほとんどは破片であり、出土総数量は、第10表のように8083点を数え、その大半を瓦が占めている。

(1)土師器：SK 1より1点、SK 2より3点、遺構外より6点の計10点が出土している。遺構外出土のうち1点は製作にロクロが使用され、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている高台付坏の破片である。他は全て小破片である。

(2)須恵器：SK 2埋土中より1点（第9図2）、遺構外より6点（第9図1・3・4）の計7点が出土している。第9図2は甕の口縁部から体部にかけての破片である。

(3)赤焼土器：遺構外より1点出土している。坏の底部から体部下半にかけての破片である。

(4)瓦：瓦は第4表のように総数8065点が出土しているが、遺構からの出土は少ない。瓦の出土は調査区北部のAグリットと調査区南西部のC-1グリットに多く、前者は塔南瓦溜の影響と考えられるが、後者は買収以前の住宅に伴う石敷に関連して出土したものが大半であり、本来的な分布とは異なる。瓦の種類には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、文字・記号瓦があり、その他に種別のできない小破片は583点出土している。量的には平瓦破片が最も多い。尚、軒丸瓦、軒平瓦の分類は「陸奥国分寺跡」(1961)に基づいている。



観察表

	種別・器種	地区遺構名	層位	外 面	内 面	写真図版
1	須恵器・甕	A-3G		叩き→ロクロナデ	ロクロナデ	22-1
2	須恵器・甕	SK 2	1層	平行叩き→ロクロナデ	ロクロナデ	22-2
3	須恵器・甕	A-2G		平行叩き→ロクロナデ	叩きオケエタ	22-3
4	須恵器・甕	A-3G		平行叩き→ロクロナデ	ロクロナデ	22-4

第9図 須恵器実測図・拓影

①軒丸瓦：総数32点出土している。全て盛土内からの出土であり、完形品はない。瓦当文様には重弁連華文、宝相華文、細弁連華文が認められる。

重弁連華文：13点出土しており、類別の可能なものは第四類（第10図1）、第六類（第10図2）、第九類（第11図1）の各1点である。第10図1は連子が全て剥落している。

宝相華文：2点出土している。共に第四類であり、うち1点を図示した（第10図3）。

細弁連華文：2点出土している。共に第二類であり、うち1点を図示した（第10図4）。

②軒平瓦：総数36点出土している。全て盛土内からの出土であり、完形品はない。瓦当文様には重弧文、偏行唐草文、均整唐草文、連珠文、山形文、細線波文、篋書文が認められる。

重弧文：2点出土している。共に瓦当面の弧文は1条しか残存していない。うち1点は第一類である（第11図2）。

偏行唐草文：11点出土している。第一類（第11図3）6点、第四類1点が類別された。

均整唐草文：2点出土している。第二類（第11図4）と第三類（第11図5）である。

連珠文：6点出土している。第一類（第11図6・第12図1）2点と第二類（第12図2・3）4点である。第1類には顎面に縄叩きだけを行なうもの（第12図1）と、縄叩きの後、ナデを行ない、幅の太い波状沈線文を施すもの（第11図6）の2種類がある。また第二類にも顎面に縄叩きをした後、幅の太い波状沈線文を施すもの（第12図2）と、幅の狭い山形沈線文を施すもの（第12図3）の2種類があり、第12図3は瓦当面と凹面との稜線部分を斜めに削り取っている。

山形文：4点出土している。第12図4は、凸面の縄叩きの後、顎部と平瓦部の境に幅の広い凹線状のナデを施している。

細線波文：2点出土している。共に単波文である。第12図5は、縄叩きが瓦当面まで及んでいる。凸面は縄叩きの後、顎部と平瓦部の境に幅の広い凹線状のナデを施している。また、瓦当面と凹面との稜線部分を斜めに削り取っている。

篋書文：2点出土している（第12図6・7）。共に細い沈線による斜格子文である。第12図6は顎部が平瓦部との接合面から剥落している。また、瓦当面と凹面との稜線部分を斜めに削り取っている。第12図7は顎部だけが残存したものである。

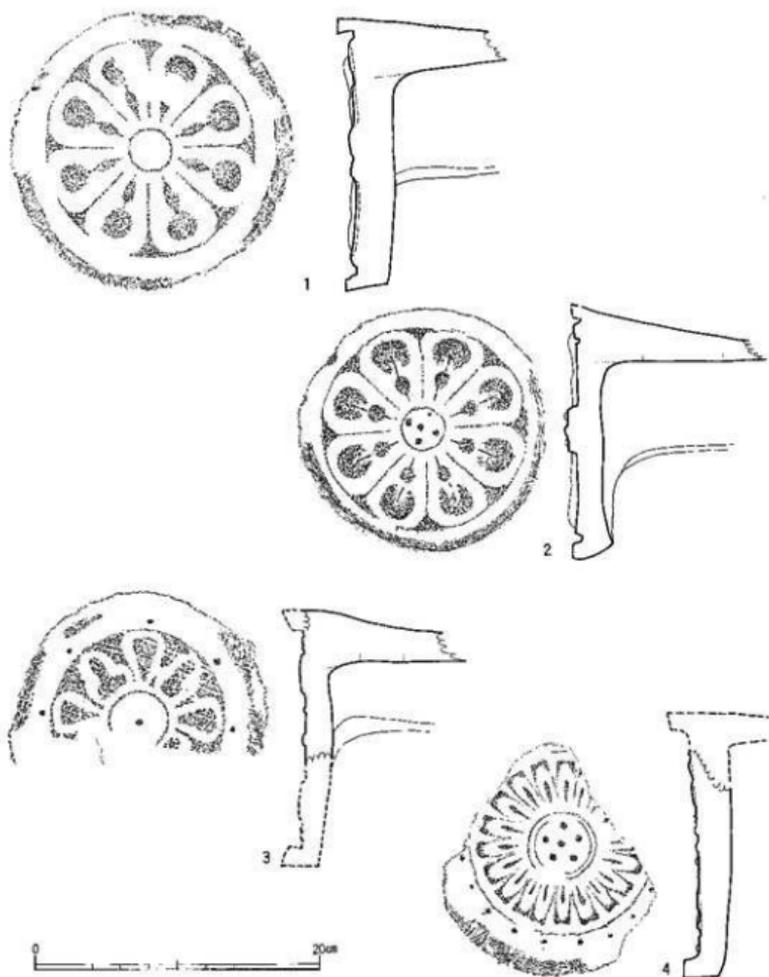
③丸瓦：総数2633点出土している。全て破片であり、完形品の形態・規模を復原できる丸瓦はない。破片には玉縁を残すものと、丸瓦部の破片があるが、無段丸瓦の確実な例はない。凸面はロクロナデがなされ、多くは先行する縄叩き目を部分的に残す。凹面は粘土紐痕・布目を残しており、粘土紐痕をナデ消しているものもある。製作は粘土紐巻作りによるものと考えられる。丸瓦の中には第13図1のようにSK1と遺構外から出土した破片が接合し、断面が偏平な半円形を呈するものがある。

第2表 軒丸瓦・軒平瓦出土数量表

	1	2	3	4
A	重舟蓮華文(分類不明) 2 軒丸瓦破片 1	軒丸瓦 1	重舟蓮華文(分類不明) 2 軒丸瓦破片 4	軒丸瓦 1 重舟蓮華文(分類不明) 2
	地味文第二類 1	軒平瓦 1	重舟蓮華文第一類 1 圓形蓮華文第一類 3 地味文第二類 1 蓮華文(斜格子文) 1	軒平瓦 2 圓形蓮華文(分類不明) 1 山形文 2
B	軒丸瓦	軒丸瓦	軒丸瓦	軒丸瓦
	軒平瓦	軒平瓦	軒平瓦	軒平瓦
C	重舟蓮華文(分類不明) 2 立廻蓮華文第四類 1 圓舟蓮華文第二類 1 軒丸瓦破片 4	軒丸瓦 1		
	圓舟蓮華文第四類 1 圓舟蓮華文(分類不明) 2 地味文第二類 1 山形文 1 軒平瓦破片 5	軒平瓦 10		
D	軒丸瓦破片 3	軒丸瓦 5		
	重舟文(分類不明) 1 山形文 1	軒平瓦 2		

地点不明	
軒丸瓦	重舟蓮華文第四類 1
軒丸瓦	重舟蓮華文(分類不明) 2
軒丸瓦	山形蓮華文第四類 10
軒丸瓦	重舟蓮華文第二類 1
軒丸瓦	軒丸瓦破片 5
軒丸瓦	圓舟蓮華文(分類不明) 1
軒丸瓦	圓舟蓮華文第二類 1
軒丸瓦	圓舟蓮華文第三類 1
軒丸瓦	地味文第一類 2
軒丸瓦	地味文第二類 1
軒丸瓦	細線波文 2
軒丸瓦	蓮華文(斜格子文) 1
軒丸瓦	軒平瓦破片 2

軒丸瓦				軒平瓦			
種類	分類	点数	合計	種類	分類	点数	合計
重舟蓮華文	第四類	1	13	重舟文	第一類	1	2
	第六類	1			類別不明	1	
	第九類	1		圓舟蓮華文	第一類	6	
	類別不明	10			第四類	1	
宝相華文	第四類	2	2	類別不明	4	11	
圓舟蓮華文	第二類	2	2	均整唐草文	第二類	1	2
その他	分類不明	15	15	第三類	1		
總計			32点	地味文	第一類	2	6
				第二類	4		
				山形文		4	4
				細線波文		2	2
				圓舟文		2	2
				その他	分類不明	7	7
				總計			36点



観 察 表

種 類	出 土 地 帯	層 位	凸 面	凹 面	研究出版
第10図1	重弁蓮華文第四類	C-2G	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	22-3
第10図2	重弁蓮華文第六類		ケズリ→ナデ	ナデ	22-6
第10図3	宝相華文第四類		ケズリ→ナデ	ナデ	22-7
第10図4	細竹蓮華文第二類		ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	22-8
第11図1	重弁蓮華文第九類	A-4G	ケズリ→ナデ	ナデ	22-9

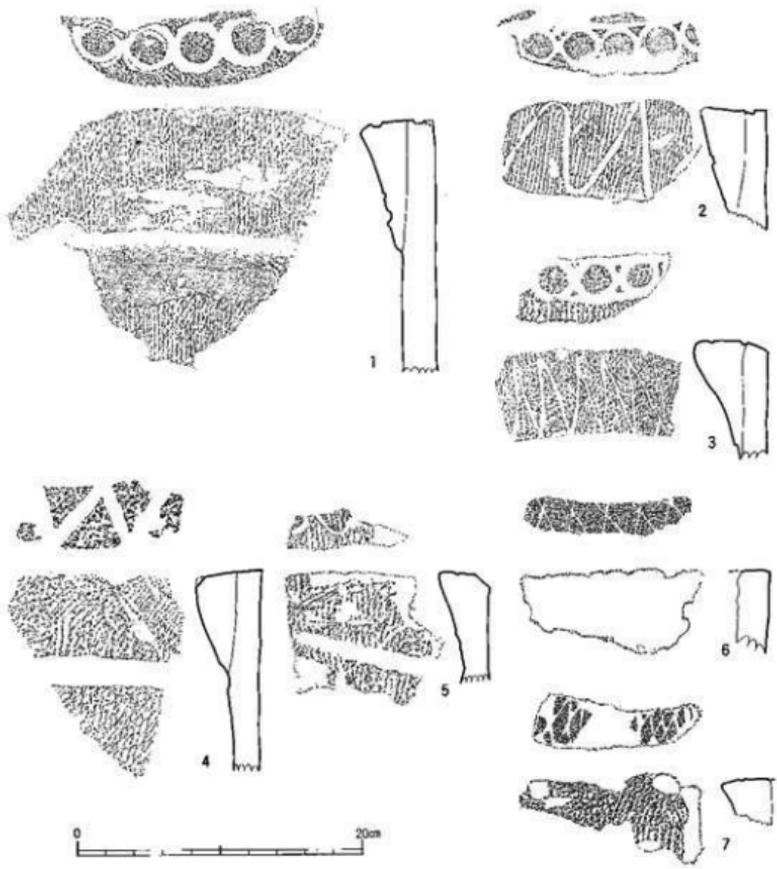
第10図 軒丸瓦実測図



観察表

種別	地区・遺構名・層位	製法	平瓦部凸面	凹面	写真枚数
第11回2	華屋文第一層 A-3G	ナデ→均整均平文・2条の波線	ナデ	帯付→ナデ	21-1
第11回3	扇形寄平文第一層 A-4G	ナデ・木	細甲ト目→ナデ	均整→ナデ	23-2
第11回4	均整均平文第二層	ナデ	扇形ト目	木目→ナデ	23-3
第11回5	均整均平文第三層	ナデ	扇形ト目	帯付→ナデ	23-4
第11回6	連珠文第一層	扇形ト目→ナデ・波状波線文		帯付→ナデ	24-2

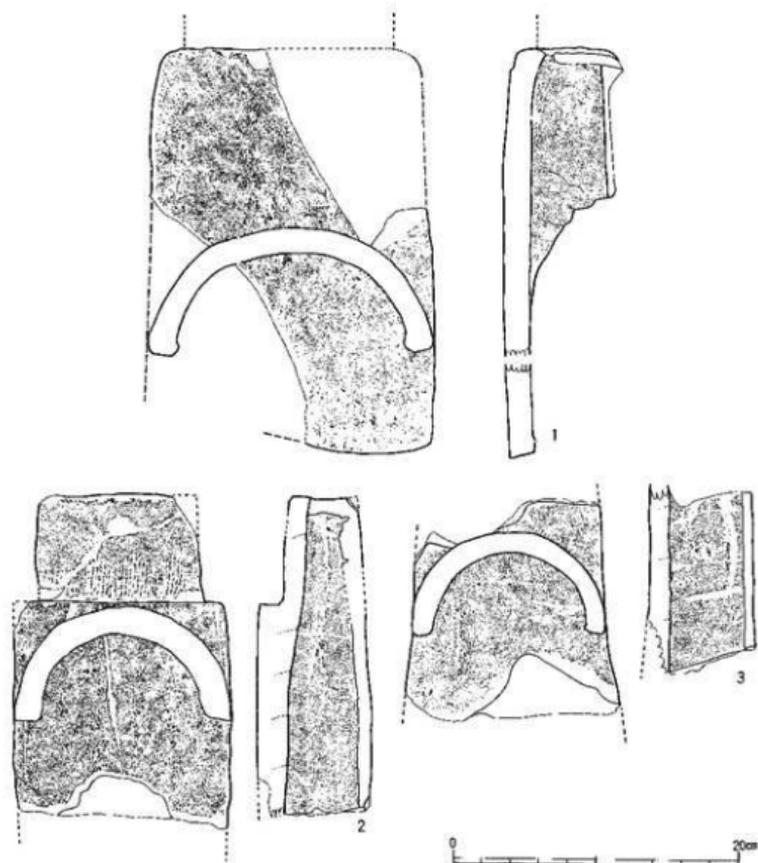
第11回 軒丸瓦・軒平瓦実測図



観察表

図番	経型	地文・透孔	層位	型	正	外 形 産 出 所	出 所	写真番号
第12図1	透孔文第一組			罫目		西宮市一宮の段の段々ナツ	赤尾→十志	24-1
第12図2	透孔文第二組			罫目			赤尾→ナツ	24-3
第12図3	透孔文第二組			罫目			赤尾→ナツ	24-4
第12図4	透孔文	A-4 G		罫目			赤尾→ナツ	24-5
第12図5	透孔文	C-1 G		罫目			赤尾→西宮との段々ナツ	24-6
第12図6	透孔文			罫目			赤尾→赤尾→ナツ	25-1
第12図7	透孔文	A-3 G		罫目			赤尾	25-2

第12図 軒平瓦実測図



観察表

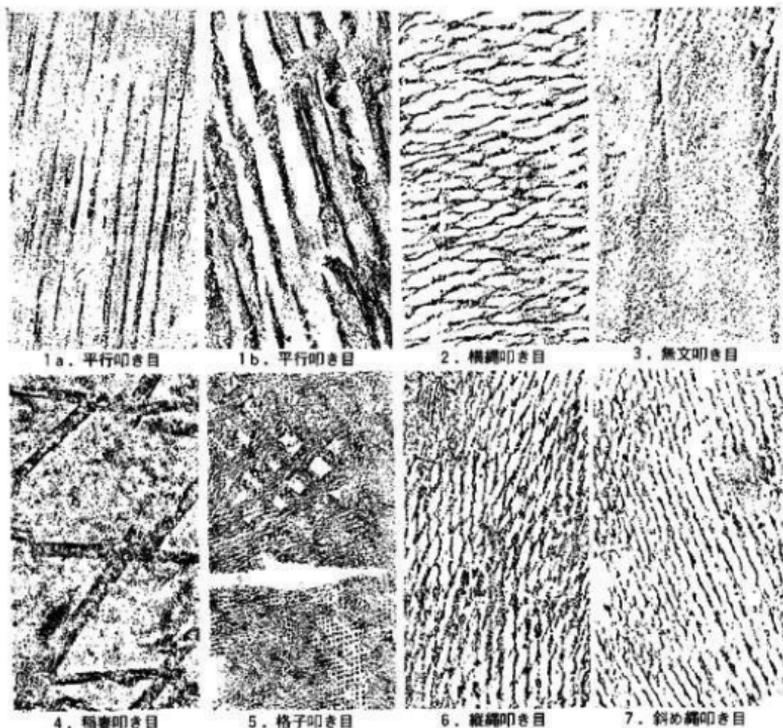
種別	発掘名	層位	面	土	色	文	図	写真図
1	大. 瓦	SK 1	1	硬	薄紅色	ハタケナシ	筋十線文・勾引	25-4
2	大. 瓦	SK 1	1	硬	鈔用赤	ハタケナシ	筋十線文・フシ	25-3
3	大. 瓦	SK 1	1	硬	薄紅色	ハタケナシ・フシ	筋十線文・勾引	25-5

第13図 丸瓦実測図

④平瓦：総数4764点出土している。全て破片である。平面形態については、確認される木口縁と側縁のなす角度等から台形状を呈するものがほとんどであるが、規模を復原できるものはない。これらの中には軒平瓦の平瓦部の破片も含まれていると考えられるが、ここでは凹凸両面に成形・調整痕等の認められる平瓦破片4015点を対象資料として、凸面に最終的に残されている叩き目と、数は少ないもののそれに先行あるいは後続する叩き目・布目・ナデの有無、凹面の布目・ナデ・木目匠痕の有無との相関により製作工程を通してⅠ～Ⅵ類に大別し、細別は凸面に最終的に残されている7種類の叩き目（第14図）により行ない、全体の様相を把握することとした。また、類別のできなかった平瓦小破片等は749点である（Ⅶ類）。

ⅰ) 叩き目の種類（第14図）

「平行叩き目」（第14図1）：原体は幅4 cm 前後のタタキ板に、長辺に平行する溝を等間隔に幾条



第14図 叩き目の種類 (Scale2/3)

(1～7の各種叩き目は瓦の木口縁・長軸と、短辺・長辺の方向が一致するように縦長の長方形に例示した。)

も切ったものと推定され、溝の幅により a : 1 ~ 3 mm の細いもの (第14図1 a)、b : 3 ~ 5 mm の太いもの (第14図1 b) に分けられる。叩きは、木口縁に対して原体の長辺を約70~90度偏向して行っているものが大半である。第18図1は、タタキ板の先端部分の形状をそのまま残した例である。

「横縄叩き目」(第14図2) : 原体は幅4 cm 前後のタタキ板に、長辺に約80~90度偏向して縄を巻いたものと推定される。叩きは木口縁に対して原体の長辺を主に約70~80度前後偏向して行っている。このため縄目の方向は瓦の長軸に対して約50~80度偏向する斜め及び横方向をとる。

「無文叩き目」(第14図3) : 原体は幅2.5~3.5 cm 前後のタタキ板そのものと推定される。叩きは、木口縁に対して原体の長辺を約80~90度偏向して行っている。

「稲妻叩き目」(第14図4) : 原体は幅3.5 cm 前後のタタキ板に、長辺に約30度前後偏向する幅2~4 mm 程の溝を左右から交互に稲妻状に切ったものと推定される。叩きは、木口縁に対して原体の長辺を約70~80度前後偏向して行っている。

「格子叩き目」(第14図5) : 原体はタタキ板に格子状に溝を切ったものと推定される。溝の幅は約3~5 mm、格子の一邊は約3~6 mm である。叩きの方向は、出土点数が少ないため明確でない。

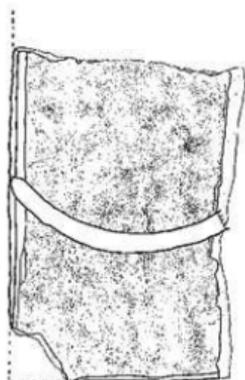
「縦縄叩き目」(第14図6) : 原体は幅約4~5 cm のタタキ板に、長辺にほぼ平行して縄を巻いたものと推定される。縄には幅約2~4 mm の細いものと、約5~6 mm の太いものの2種類が認められる。叩きは、木口縁にほぼ直交して行っている。このため縄目の方向は瓦の長軸に平行する縦方向をとる。

「斜め縄叩き目」(第14図7) : 原体は「縦縄叩き目」のものと同様である。叩きは、木口縁に対して斜行して行っている。このため縄目の方向は瓦の長軸に斜行する方向をとる。

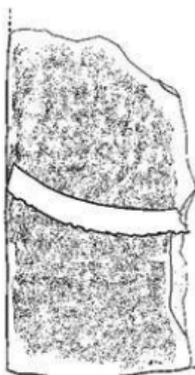
このほか、後続する布目、叩き目、ナデにより叩き目がつぶれたり、叩き目の痕跡が部分的に認められる「縄叩き目」がある。叩きの方向については明確でないものもあるが、原体は「縦縄叩き目」・「斜め縄叩き目」と同様のものと推定される。

ii) 分類

I類 : 凸面に最終的に残されている叩き目に先行し、布目あるいは叩き目、希に布目とさらにそれに先行する叩き目の認められるもので、凹面には布目を切るナデが全面に施される場合が多く、さらにそれを切る木目圧痕を残すものも多い。I類に属する平瓦破片は、1875点で、I~VIIの39%である。凸面に最終的に残される叩き目(二次叩き目)には平行叩き目、横縄叩き目、無文叩き目、稲妻叩き目の4種類がある。木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は一枚作りによるものと考えられ、その工程は①凸面 : 一次叩き・凹面 : 布目(布を貼った凸型台)、



1 (I Aa 類)



2 (I Ab 類)



3 (I Aa 類)



第15図 平瓦実測図(1)

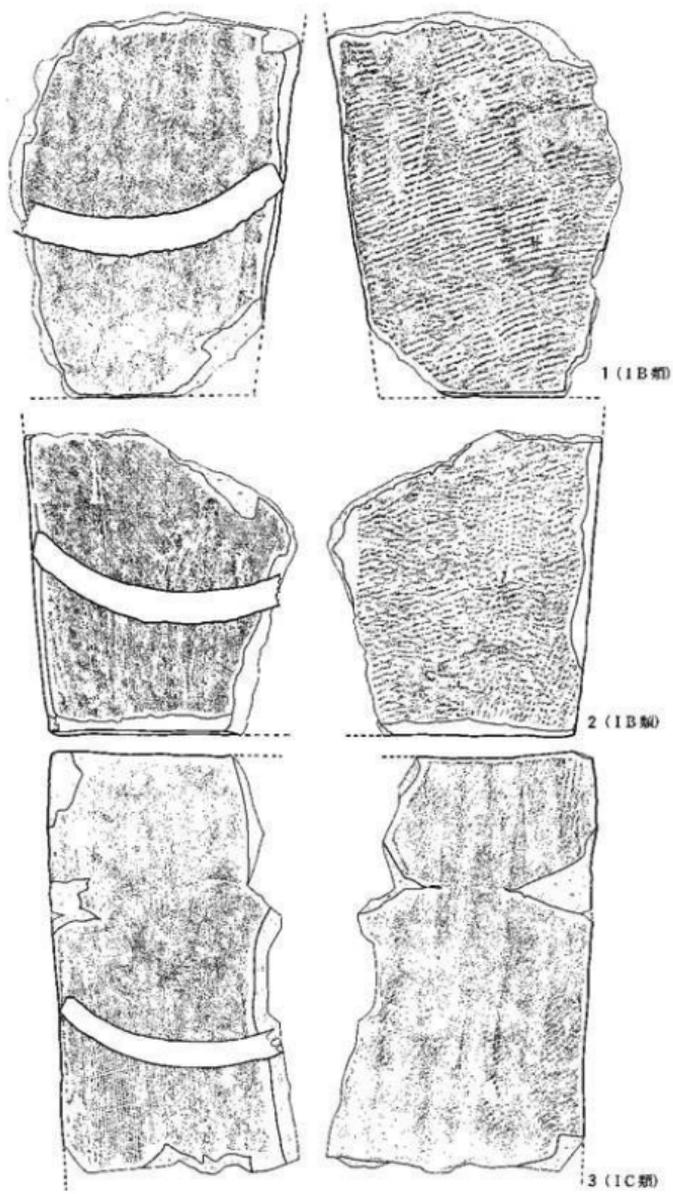
②凹面：ナデ・凸面：布目（布を貼った凹型台）、③凸面：二次叩き・凹面：木目疝痕（布を貼らない凸型台）として示され、①を成形、②、③を調整として理解できる。

I A 類：平行叩き目を最終的な叩き目として凸面に残すものである（第15図1～3）。総数719点であり、I～VII類の15.1%（719/4764）、I類の38.3%（719/1875）を占める。原体に切られた溝の細いもの（I Aa 類）は600点、太いもの（I Ab 類）は119点であり、叩き目にナデを施しているものも多く（I Aa 類の53.3%、I Ab 類の21.0%）、他のI類とは製作工程上の相違がある。このうち、平行叩き目に先行する布目を残すものは91点（第18図1～3）、I A 類の12.7%、先行する叩き目を残すものは47点（第18図4、第19図2）、I A 類の6.5%認められ、布目とさらにそれに先行する叩き目を残すものも5点（第18図5、第19図1）ある。第18図3は凹型台の側縁部疝痕を残している。先行する叩き目（一次叩き目）は縄叩き目に限られている。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは1.3～2.0 cm であり、1.7～1.9 cm のものが多い。胎土は緻密であるが砂粒を比較的多く含み、焼成は良好あるいは極めて良好で、灰色～灰白色・青灰色を呈する。

I B 類：横縄叩き目を最終的な叩き目として凸面に残すものである。（第16図1・2）。総数874点であり、I～VII類の18.3%（874/4764）、I類の46.6%（874/1875）を占める。叩き目にナデを施しているものは比較的少ない。このうち、横縄叩き目に先行する布目を残すものは23点（19図3・4）でI B 類の2.6%、先行する叩き目を残すものは257点（第16図2）でI B 類の29.4%認められ、布目とさらにそれに先行する叩き目を残すものも11点（第19図5）ある。先行する叩き目（一次叩き目）は縄叩き目に限られており、残存する例も多く、それが縦縄叩き目であることが知られるものもある（第16図2）。凹面には第20図1のように明瞭な木目疝痕を幅約4～5 cm 単位で残しているものもある。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは1.3～3.0 cm であり、2.0～2.4 cm のものが多い。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色～灰白色を呈する。

I C 類：無文叩き目を最終的な叩き目として凸面に残すものである（第16図3）。総数258点であり、I～VII類の5.4%（258/4764）、I類の13.8%（258/1875）を占める。叩き目にナデを施しているものは確認されていない。布目とさらにそれに先行する叩き目を残すものは15点（第19図6、第20図4）、I C 類の5.8%を占める。先行する叩き目は、大半のものに残されており、全て縄叩き目である。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは1.5～1.9 cm である。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色～灰白色を呈する。

I D 類：稲妻叩き目を最終的な叩き目として凸面に残すものである。総数24点と少なく、I～VII類の0.5%（24/4764）、I類の1.3%（24/1875）である。叩き目にナデを施しているものは1点だけである。このうち、稲妻叩き目に先行する布目を残すものは3点（第21図3）でI D



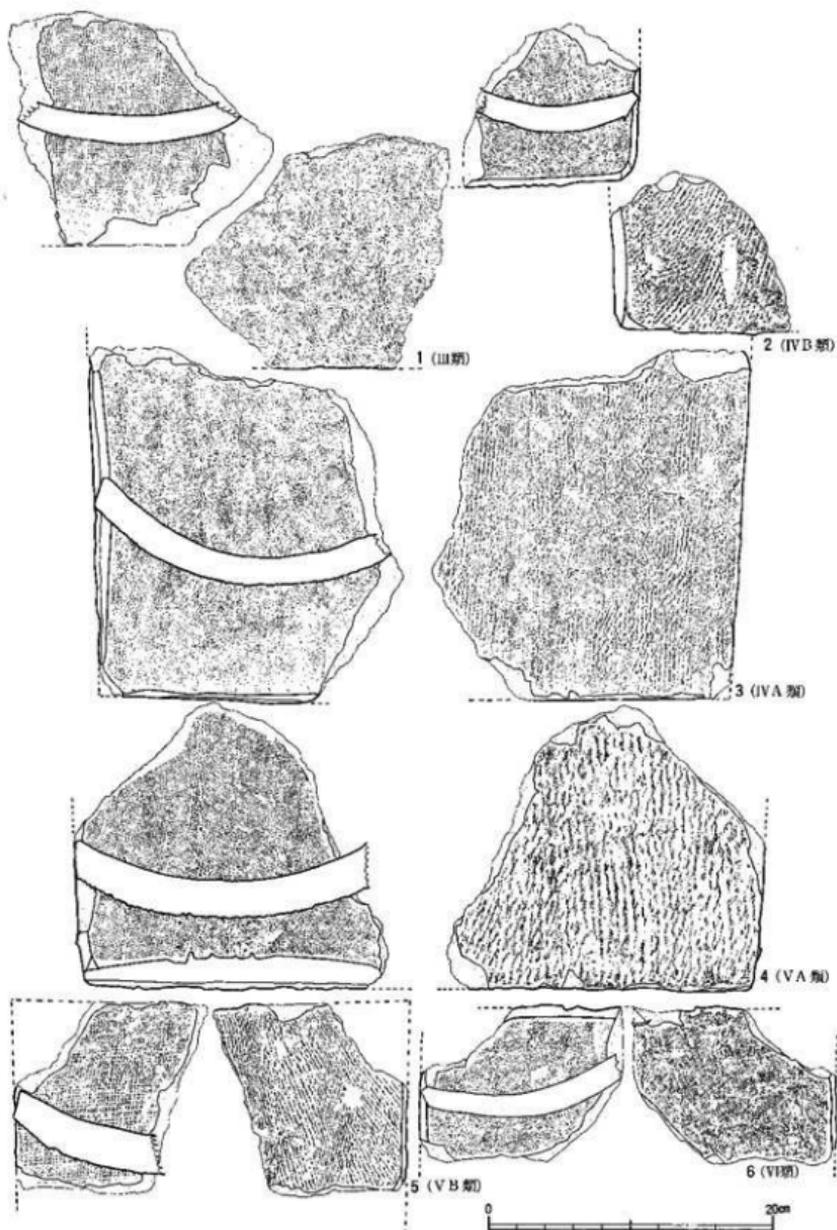
第16図 平瓦実測図(2)

類の12.5%、先行する叩き目を残すものは16点でI D類の66.7%認められ、布目とさらにそれに先行する叩き目を残すものも1点(第21図1)ある。先行する叩き目(一次叩き目)は平行叩き目である第21図2の1点を除き、他は全て縄叩き目である。出土点数が少ないこともあり、明確な広端の存在は確認されていない。また、稲妻叩き目は軒平瓦の平瓦部に認められる例や、後述するようにI D類に基づいて製作された隅切り瓦(第24図4)、熨斗瓦(第25図2)があることから、「平瓦」の破片としては認識しえない面もある。厚さは1.8~2.0 cmである。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

II類：凸面に最終的に残されている叩き目に後続し、布目の認められるもので、凹面にはナデが施されており、第21図4のようにナデに先行する木目圧痕のような痕跡の認められるものもある。II類に属する平瓦破片は3点で、I~VII類の0.1%である。凸面に残されている叩き目は格子叩き目1種類である。出土点数が少なく、明瞭な木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は桶巻き作りか1枚作りによるかは不明であるが、その工程は①凸面：叩き(格子叩き目)・凹面：?、②凹面：ナデ・凸面：布目(布を貼った凹型台)として示され、①を成形、②を調整として理解できる。凸面の布目にナデを施しているものもある。また、第21図4には凹型台の側縁部圧痕が認められる。出土点数が少ないこともあり、明確な広端の存在は確認されていない。厚さは1.8 cm前後である。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

III類：凸面をナデにより最終的に調整しているもので、それに先行する叩き目をほとんど残さず、凹面に布目をそのまま残すもの。III類に属する平瓦破片は41点で、I~VII類の0.9%である。凸面に残されている叩き目は縄叩き目だけである(第17図1)・木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は一枚作りによるものと考えられ、その工程は①凸面：叩き→ナデ・凹面：布目(布を貼った凸型台)として示され、①により成形・調整が行なわれていると理解される。しかし、凹面には部分的に布目の重複を残すものがいくつか認められ、III類が1工程だけではないものを含む可能性もあるが、対象資料が破片のため、ここではIII類に含めた。出土点数が少ないこともあり、明確な広端の存在は確認されていない。このため、III類には軒平瓦の平瓦部の可能性もある。厚さは1.6~2.2 cmである。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい青灰色を呈する。

IV類：凸面に最終的に残されている叩き目に先行あるいは後続する叩き目・布目が認められず、凸面には叩き目のつぶれ、凹面には布目を切るナデを残すもの。IV類に属する平瓦破片は1408点で、I~VII類の29.6%である。凸面に残されている叩き目には縦縄叩き目、斜め縄叩き目の2種類がある。木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は一枚作りによるものと考えられ、その工程は①凸面：叩き・凹面：布目(布を貼った凸型台)、②凹面：ナデ・凸面：叩き目のつ



第17圖 平瓦実測圖 (3)

ぶれ（布を貼らない凹型台）として示され、①を成形、②を調整として理解できる。

IV A 類：縦縄叩き目を凸面に残すものである（第17図3）。総数1195点であり、I～VII類の25.1%（1195/4764）を占める。

IV B 類：斜め縄叩き目を凸面に残すものである（第17図2）。総数213点であり、I～VII類の4.5%（213/4764）を占める。

IV A 類：IV B 類の比率は約5.6：1である。また、布日には1 cm 四方に経糸・緯糸が共に8～12本の細かなものと4～6本の粗いものがある。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは2.2～2.8 cm である。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は主に灰色を呈する。

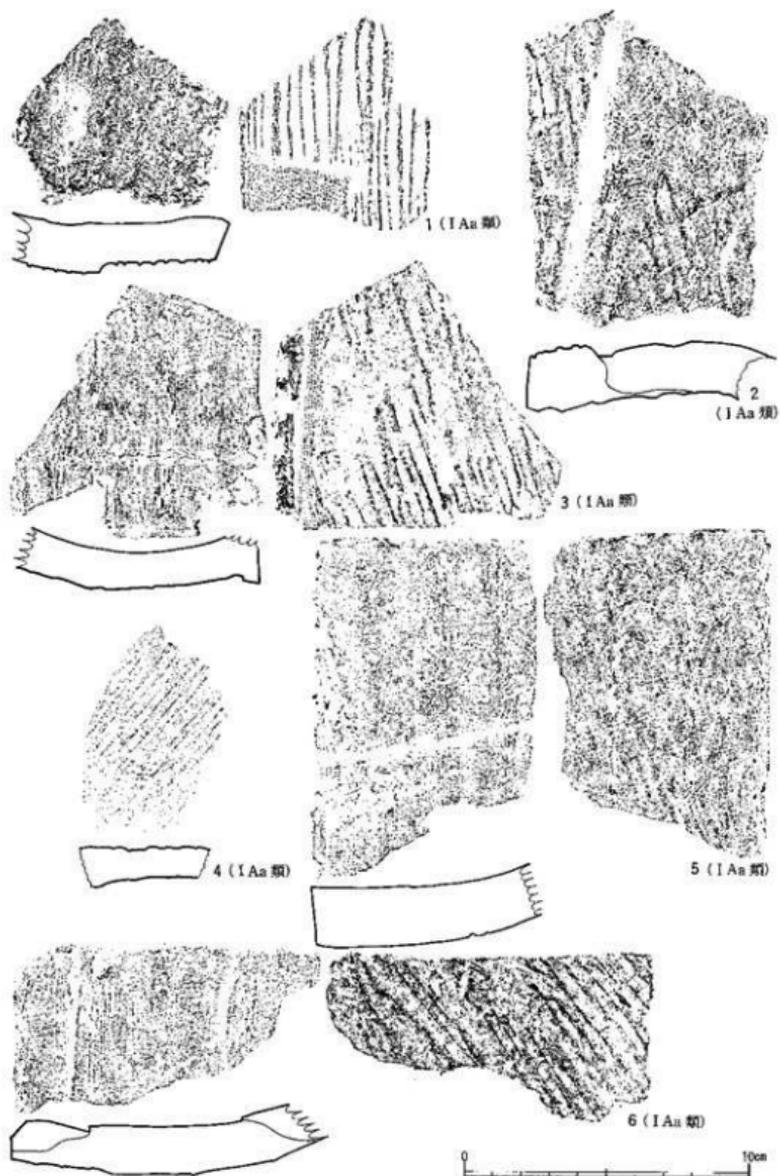
V 類：凸面に最終的に残されている叩き目に先行あるいは後続する叩き目・布日が認められず凸面には叩き目、凹面には布目をそのまま残すもの。V 類に属する平瓦破片は594点でI～VII類の12.5%である。凸面に残されている叩き目には縦縄叩き目、斜め縄叩き目の2種類がある。木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は一枚作りによるものと考えられ、その工程は①凸面：叩き・凹面：布目（布を貼った凸型台）として示され、①を成形として理解できる。

V A 類：縦縄叩き目を凸面に残すものである（第17図4）。総数527点であり、I～VII類の11.1%（527/4764）を占める。

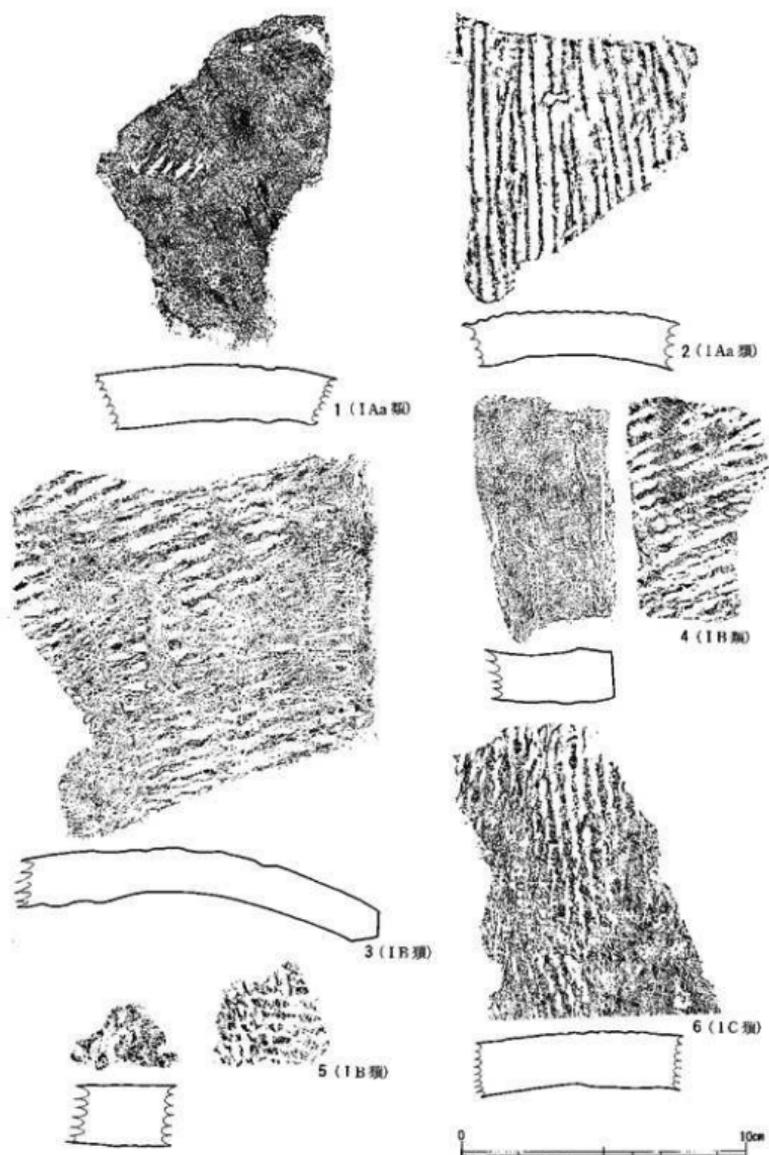
V B 類：斜め縄叩き目を凸面に残すものである（第17図5）。総数67点であり、I～VII類の1.4%（67/4764）を占める。

V A 類：V B 類の比率は約7.9：1で、両者にみられる叩き目の縄の条、布目についてはV 類と同様である。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは1.9～2.9 cm である。胎土は緻密であるが砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は主に灰色を呈する。

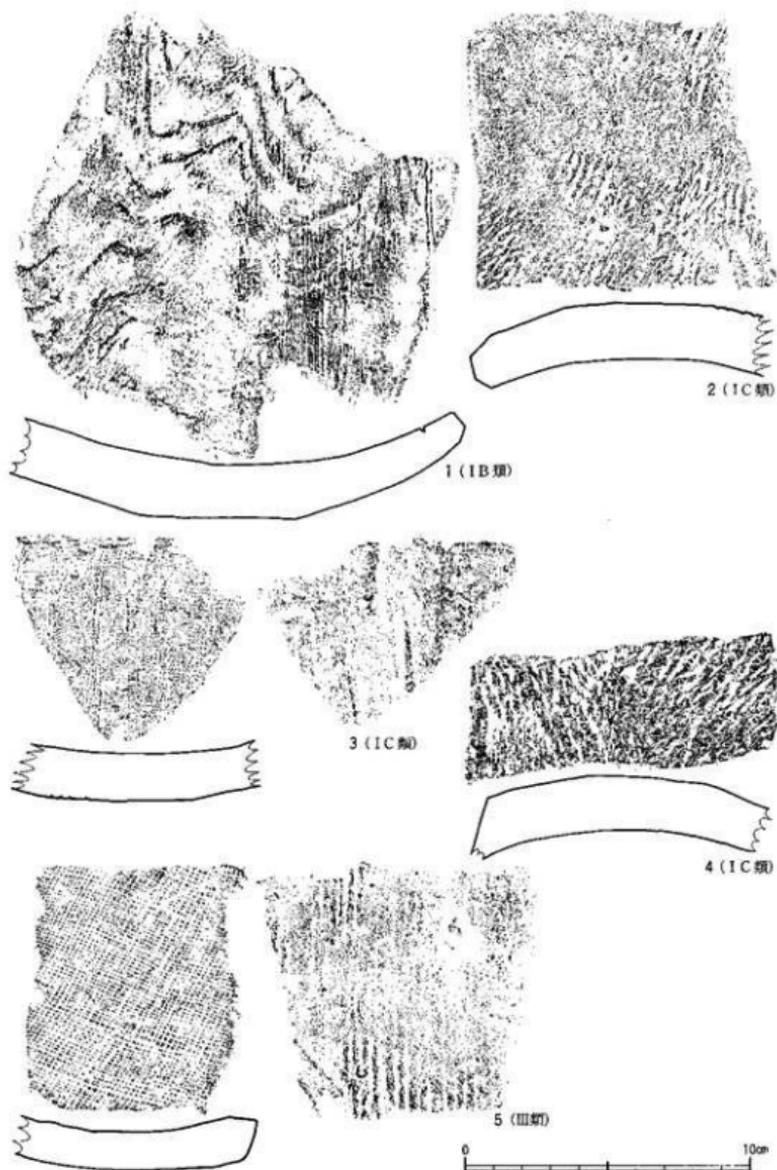
VI 類：凸面をナデにより最終的に調整しているもので、それに先行する叩き目を残さず、凹面には布目を切るナデあるいはさらにそれを切る木目圧痕を残すもの（第17図6）。VI 類に属する平瓦破片は94点でI～VII類の2.0%である。木骨痕・粘土板合せ目は認められず、製作は一枚作りによるものと考えられ、その工程は①凸面：？・凹面：布目（布を貼った凸型台）、②凹面：ナデ・凸面：？（凹型台）、③凸面：（？）→ナデ・凹面：木目圧痕（布を貼らない凸型台）として示される。広端の存在は比較的多く確認されている。厚さは1.8～2.5 cm である。胎土は緻密である砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は灰色～灰白色を呈する。VI 類は製作に3工程が推定され、I 類の中で、最終的な凸面の叩き目にナデを施す例の多いI A 類に属する可能性もある。



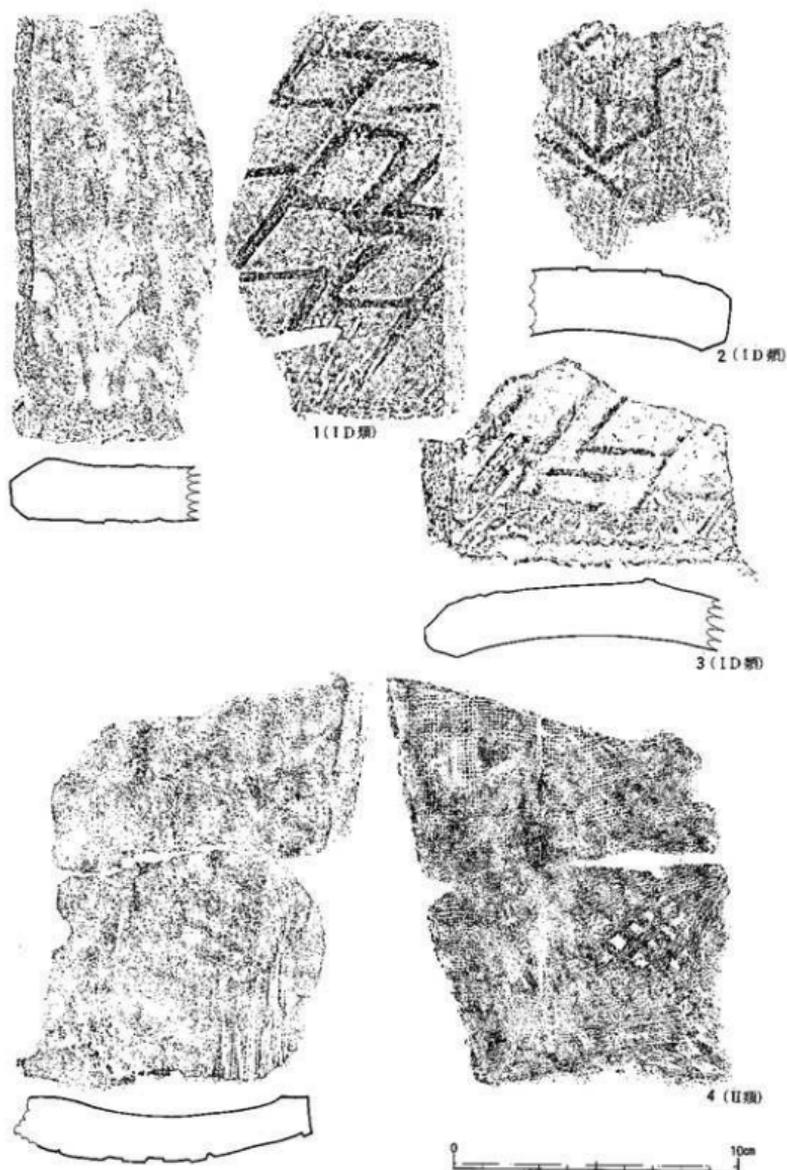
第18圖 平瓦拓影 (1)



第19圖 平瓦拓影 (2)



第20図 平瓦拓影 (3)



第21圖 平瓦拓影 (4)

第3表 平瓦観衆表

	分類	地区別観衆	地位	内	外	山	芳名回数
第15回1	I Aa級	SK 2	1席	平川町3番		ナダ、六日往返	28-1
第15回2	I Ab級			平川町3番		六日、ナダ→本、ナダ	28-2
第15回3	I Aa級			新町3番→春日→平川町3番		ナダ、六日往返	28-3
第16回1	I B級	A-4G		備前町3番		ナダ、本往返	27-1
第16回2	I B級	A-1G		備前町3番→備前町3番		六日往返→本、ナダ	27-2
第16回3	I C級	SK 1 SK 2	1席	備前町3番→備前町3番		六日、ナダ→本、ナダ	27-3
第17回1	無 類	A-3G		備前町3番→ナダ		本往	
第17回2	I B級	A-3G		備前町3番→春日→備前町3番		六日、ナダ	28-3
第17回3	I B級			備前町3番→春日→備前町3番		六日、ナダ	28-1
第17回4	V A級			備前町3番		六日往	28-2
第17回5	V B級			備前町3番		六日往	28-4
第17回6	V 無 類			ナダ		六日、ナダ	28-5
第18回1	I Aa級	C-1G		六日→平川町3番		ナダ→本往返	29-1
第18回2	I Aa級	A-4G		春日→平川町3番、ナダ		六日→ナダ、六日往返	29-2
第18回3	I Aa級	SK 2	1席	春日、備前町の備前町3番→平川町3番→ナダ		ナダ→本往返	29-3
第18回4	I Aa級	A-4G		備前町3番→平川町3番、ナダ		六日→ナダ	29-4
第18回5	I Aa級	A-4G		備前町3番→春日→平川町3番→ナダ		ナダ→本往返	29-5
第18回6	I Aa級	A-3G		平川町3番→ナダ		六日→ナダ、六日往返	30-1
第19回1	I Aa級	SK 1	1席	備前町3番→春日→平川町3番→ナダ		六日→ナダ、六日往返	29-6
第19回2	I Aa級	A-3G		備前町3番→平川町3番		六日→ナダ→六日往返	29-7
第19回3	I B級	A-1G		六日→備前町3番		六日→ナダ	30-2
第19回4	I B級			六日→備前町3番		六日往→本、ナダ	30-5
第19回5	I B級	B-1G		備前町3番→春日→備前町3番		ナダ	30-4
第19回6	I C級	SK 2	1席	備前町3番→春日→備前町3番		六日→ナダ	
第20回1	I B級	A-4G		備前町3番		六日→ナダ、六日往返→数回?	30-3
第20回2	I C級			備前町3番→備前町3番		六日往→本、ナダ	31-4
第20回3	I C級	C-1G		備前町3番→備前町3番		六日、ナダ→本往返	31-1
第20回4	I C級	A-3G		備前町3番→春日→備前町3番		六日→ナダ	31-3
第20回5	無 類	SK 2	1席	備前町3番→ナダ		六日往(数回?)	
第21回1	I D級	D-4G		備前町3番→春日→備前町3番		六日→ナダ、六日往返	31-5
第21回2	I D級	SK 2	1席	平川町3番→備前町3番→ナダ		六日→ナダ	31-2
第21回3	I D級	A-4G		六日→備前町3番		ナダ→本往返	
第21回4	無 類	A-4G		六日→六日→春日、六日往の備前町3番、ナダ		ナダ	31-6

第4表 平瓦・丸瓦出土数量表

	I				II	III	IV	
	1A	1B	1C	1D			WA	WB
A-1G	9 (3.1)	20 (11.2)	0 (0)	1 (0.6)	0 (0)	0 (0)	31 (28.7)	12 (6.7)
A-2G	6 (5.7)	10 (9.5)	0 (0)	1 (1.0)	0 (0)	1 (1.0)	28 (26.7)	5 (4.8)
A-3G	128 (27.1)	111 (24.2)	28 (5.9)	2 (0.4)	0 (0)	7 (1.5)	36 (7.6)	15 (3.2)
A-4G	54 (20.5)	67 (25.4)	11 (4.2)	1 (0.4)	2 (0.8)	5 (1.9)	16 (6.1)	3 (1.1)
B-1G	0	4	0	0	0	0	8	0
B-2G	1	2	1	0	0	1	3	1
B-3G	8 (8.4)	17 (17.9)	4 (4.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	18 (18.9)	8 (8.4)
B-4G	20 (18.2)	21 (19.1)	8 (7.3)	0 (0)	0 (0)	1 (0.9)	18 (16.4)	14 (12.7)
C-1G	186 (14.6)	232 (18.2)	77 (6.0)	8 (0.6)	0 (0)	8 (0.6)	325 (25.5)	69 (5.4)
C-2G	14	3	5	0	0	0	6	0
D-1G	85 (13.3)	104 (18.8)	41 (7.4)	3 (0.5)	0 (0)	2 (0.4)	160 (28.9)	17 (3.1)
D-2G	2	0	1	0	0	0	0	0
地点不明	91 (6.5)	261 (18.7)	58 (4.1)	4 (0.3)	1 (0.1)	7 (0.5)	321 (37.2)	69 (4.9)
遺構外小計	604 (13.3)	855 (18.8)	234 (5.2)	20 (0.4)	3 (0.1)	32 (0.7)	1,190 (26.3)	213 (4.7)
S K 1	39 (64.8)	8 (8.8)	5 (5.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
S K 2	55 (54.0)	6 (5.9)	10 (9.8)	4 (3.9)	0 (0)	8 (7.8)	0 (0)	0 (0)
S K 3	0	3	3	0	0	0	4	0
S K 4	1	2	6	0	0	1	1	0
S X 1	0	0	0	0	0	0	0	0
総数	719 (15.1)	874 (18.3)	238 (5.4)	24 (0.5)	3 (0.1)	41 (0.9)	1,195 (25.0)	213 (4.5)

V		VI	VII (分類不可)	平瓦総数	丸瓦総数	丸瓦・平瓦 の割合不可	総 数
VA	VB						
41 (23.0)	2 (1.1)	0 (0)	42 (23.6)	178 (100%)	110	22	310
16 (15.2)	3 (2.9)	3 (2.9)	32 (30.3)	105 (100%)	41	20	166
32 (6.8)	12 (2.5)	7 (1.5)	91 (19.3)	472 (100%)	249	78	799
5 (1.9)	1 (0.4)	3 (1.1)	96 (36.2)	264 (100%)	164	34	462
10	0	0	6	28	15	0	43
3	0	1	8	21	12	0	33
14 (14.7)	1 (1.1)	7 (7.4)	18 (19.0)	95 (100%)	77	25	197
12 (10.9)	0 (0)	5 (4.5)	11 (10.0)	110 (100%)	73	69	252
105 (8.2)	16 (1.3)	12 (0.9)	238 (18.7)	1,276 (100%)	747	121	2,144
1	0	1	3	33	7	0	40
42 (7.6)	2 (0.4)	13 (2.3)	85 (15.3)	554 (100%)	296	121	971
0	0	1	0	4	0	0	4
243 (17.4)	27 (1.9)	21 (1.5)	96 (6.9)	1,399 (100%)	729	93	2,221
524 (11.5)	64 (1.4)	74 (1.6)	726 (16.0)	4,539 (100%)	2,520	583	7,642
0 (0)	0 (0)	6 (6.6)	13 (14.3)	91 (100%)	50	0	141
0 (0)	0 (0)	9 (8.8)	10 (9.8)	102 (100%)	39	0	141
2	1	3	0	16	12	0	28
1	1	2	0	15	9	0	24
0	1	0	0	1	3	0	4
327 (11.1)	67 (1.4)	94 (2.0)	749 (15.7)	4,761 (100%)	2,633	583	7,980

Ⅲ) 平瓦の類別組成

各類別に基づいた平瓦出土数を第4表に示した。各遺構及び各地点別遺構外出土の類別組成をみると、遺構の中では比較的出土数の多いSK1・SK2と遺構外との間には大きな相異がある。つまり、SK1はⅠ類・Ⅵ類、SK2はⅠ類・Ⅲ類・Ⅵ類に限られるのに対し、遺構外では各類が全て認められる。

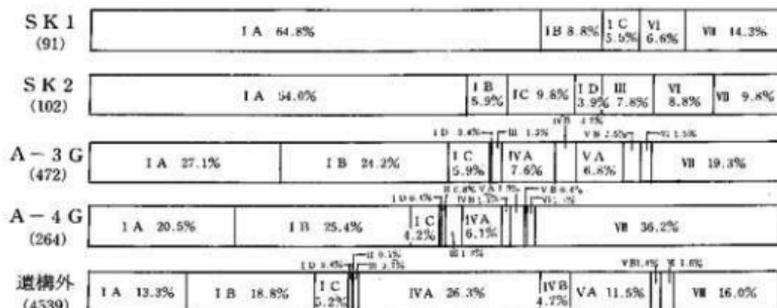
SK1とSK2には重複関係はあるが、共に成形・調整に3工程を経るⅠ類・Ⅵ類を主体としていること、ⅠA類が高率を占め、ⅠB類・ⅠC類・Ⅵ類の比率も類似することから、ほぼ同時期の平瓦組成を示していると考えられる。SK1より新しいSK2から出土しているⅠD類・Ⅲ類については、両者に共通するⅠA類・ⅠB類・ⅠC類・Ⅵ類に後続する可能性もあるが、出土数が少ないため明確でない。

第5表 SK1平瓦類別数量表

類別	数量	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ	
		先行布目	先行編み目	先行平行布目	先行編み目 →先行布目	後続ナダ	(布目)→ナダ	木目戸板
ⅠA	59	7	1	0	4	37	59	28
ⅠAa	50	7	1	0	4	35	50	27
ⅠAb	9	0	0	0	0	2	9	1
ⅠB	8	0	1	0	0	0	8	2
ⅠC	5	0	5	0	0	0	5	3
ⅠD	0							
Ⅲ	0							
Ⅵ	6	1	0	0	0	0	6	1
Ⅶ	13							
計	91							

第6表 SK2平瓦類別数量表

類別	数量	Ⅰ		Ⅱ			Ⅲ	
		先行布目	先行編み目	先行平行布目	先行編み目 →先行布目	後続ナダ	(布目)→ナダ	木目戸板
ⅠA	55	16	2	0	1	41	55	26
ⅠAa	53	16	2	0	1	41	53	26
ⅠAb	2	0	0	0	0	0	2	0
ⅠB	6	1	1	0	0	0	6	1
ⅠC	10	0	6	0	4	0	10	6
ⅠD	4	0	2	1	0	0	4	4
Ⅲ	8	0	6	0	0	0	0	0
Ⅵ	9	0	0	0	0	0	9	0
Ⅶ	10							
計	102							



第22図 SK 1・SK 2・A-3 G・A-4 G・遺構外全平瓦組成図

また、遺構外出土平瓦の全組成は、I～VII類により構成され、I A類・I B類・IV A類・V A類を主体としており、調査区周辺に供給された平瓦組成を示すものと考えられる。地点別でもその類別構成はほぼ同様であるが、組成では異なるところもみられる。

これらのことから、遺構外全組成とSK 1・2との組成の違いにより、当調査区内で類別された平瓦は、以下のA・B 2群に分けられる。

A群：SK 1・2出土の平瓦を構成するI類・III類・VI類—SK 1・2は検出された位置から、その出土平瓦は塔か築地の平瓦組成の一部と推定され、遺構外全組成ではI A類とI B類が卓越し、I C類・VI類がそれに次いでいる。I D類・III類については、軒平瓦の平瓦部の可能性があるためか組成率は低く、この傾向は当調査区内でのA群の基本的な在り方といえる。

B群：遺構外全平瓦組成を構成するI～VI類から、SK 1・2出土の平瓦を構成する各型及び出土数量の極めて少ないII類を除いたIV類・V類—遺構外全組成ではIV A類が卓越しており、V A類、IV B類がそれに次ぎ、V B類の組成率は低く、この傾向は当調査区内でのB群の基本的な在り方といえる。

遺構外全平瓦組成におけるA群とB群の組成率は、A群：40.0%、B群：43.9%で、A群とB群がほぼ同率を占める。しかし、調査区北側に隣接する塔南瓦溜に最も近いA-3・4グリットでは、A群：60.6% (A-3 G)、53.5% (A 4 G)、B群：20.1% (A 3 G)、9.5% (A-4 G) で、A群がB群より高い比率を占めており、瓦溜との関連性も考えられる。

⑤**道具瓦**：総数17点出土している。遺構から出土しているものは4点である。面戸瓦、隅切り瓦、熨斗瓦、隅木蓋瓦の4種類が認められる。

面戸瓦：7点出土しており、4点を図示した(第23図1～4)。全て凸面は縄叩きの後、ロクロナデをしており、凹面には粘土紐痕と布目が認められる。断面は半円形を呈する。製作は粘土紐巻き作りによる丸瓦と同様の方法に基づいていると考えられ、二分割後、木口面の調整をし、一側縁から向木口縁にかけて三角形に切り落とし、側面の調整を行なっている。

これらの面戸瓦は規模、形態等から以下のようにI類・II類の2つに分けられる。

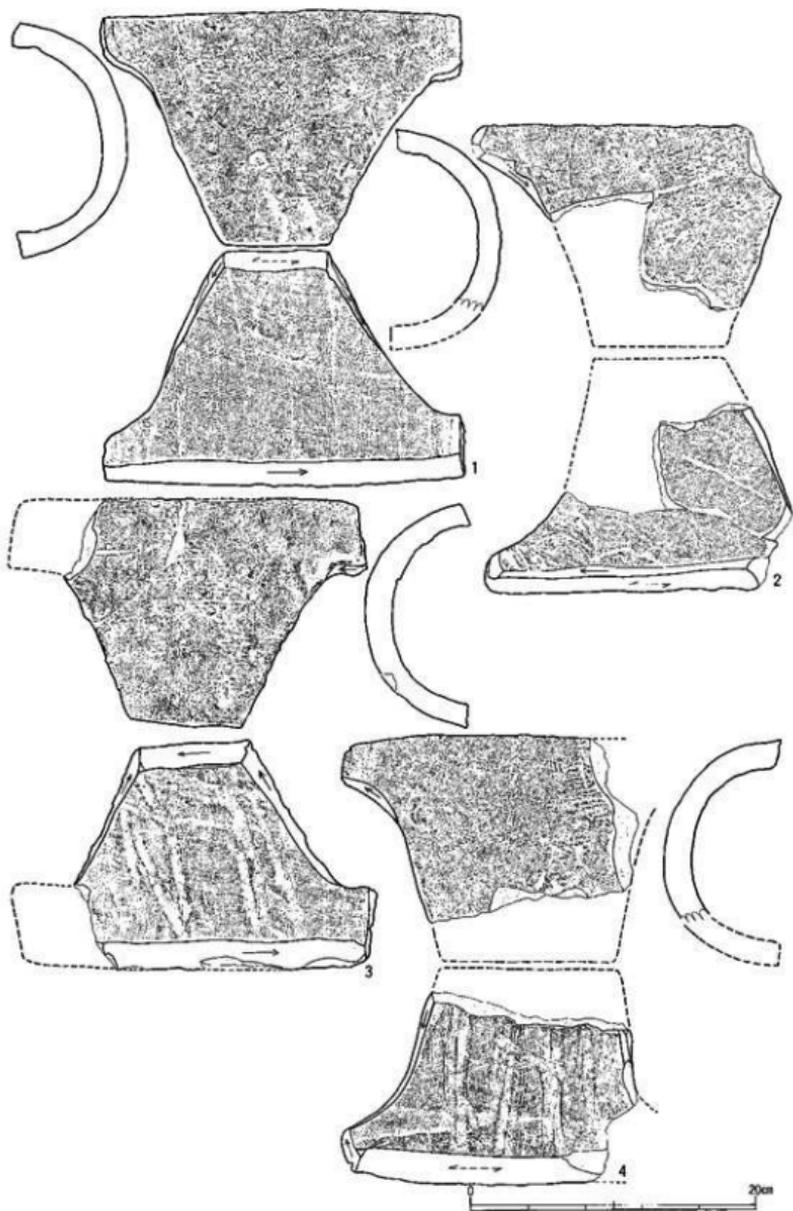
I類(第23図1・2)：第23図1の完形品からその規模は、長さ25.1 cm、幅16.5 cm、高さ7.9 cm、厚さ1.8 cmである。木口縁と側縁のなす角度は90度前後である。粘土紐痕をそのまま残している。胎土は緻密で砂粒をほとんど含まず、焼成は極めて良く、色調は青灰色を呈する。他に2点出土している。

II類(第23図3・4)：第23図3からのその規模は、長さ25.2 cm(推定)、幅16.0 cm、高さ7.5 cm、厚さ2.1 cmである。木口縁と側縁のなす角度は100度前後である。粘土紐痕を指でナデ消している。胎土は緻密だが砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は灰色～明灰色を呈する。他に1点出土している。

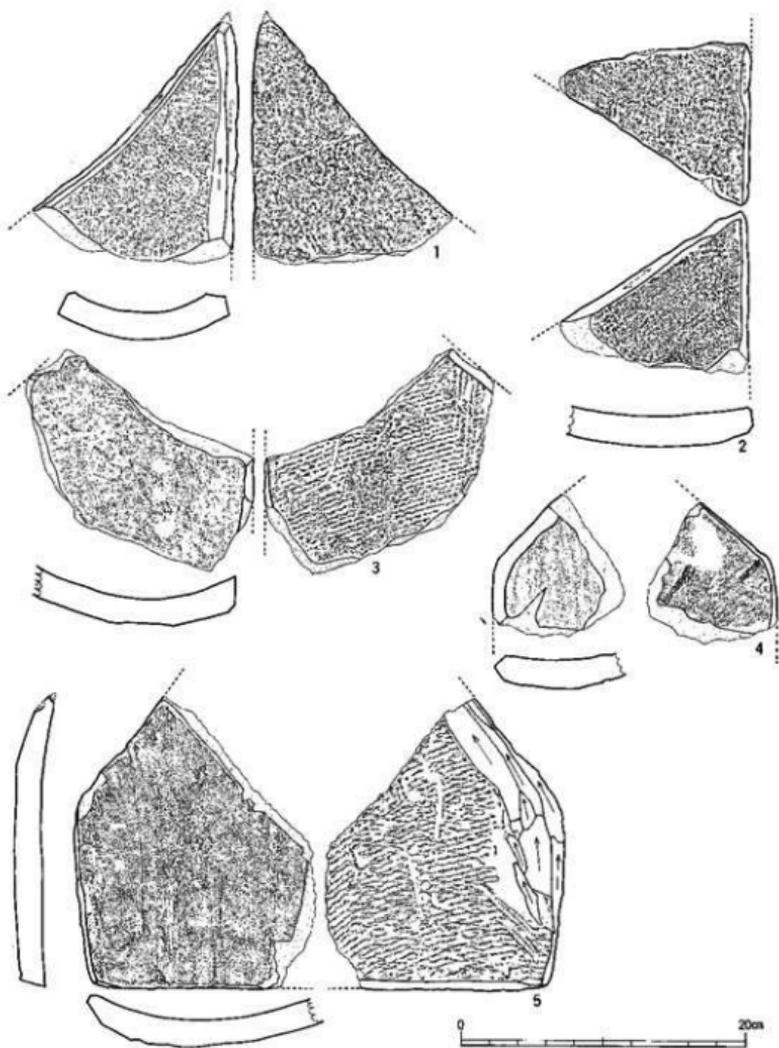
隅切り瓦：7点を出土している(第24図1～5)。製作は、第24図1、2は平瓦VI類、3、5は平瓦I B類、4は平瓦I D類に基づいている。第24図2には凸面の調整に刷毛目が使用されている。これらは平瓦の側縁端部付近から他の一側縁へ斜めに切り落としてその形態を作り出していると考えられるが、第24図5のように、切り落とされた側縁部にさらに調整のためか、ケズリを施すものもある。

熨斗瓦：2点出土している(第25図1・2)。製作は、第25図1は平瓦I B類、第25図2は平瓦I D類に基づいている。幅は第25図1は16.2 cm、2は17.4 cmである。

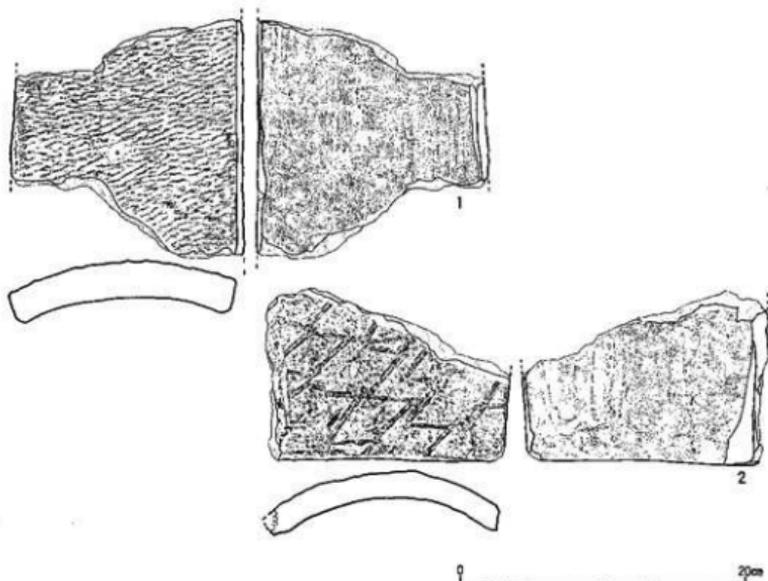
隅木蓋瓦：1点出土している(第26図)。完形品ではないが、平面形は方形あるいは長方形を基調としているものと考えられ、その規模は長さ29.0 cm以上、幅32.7 cm(推定)、高さ7.5 cm、厚さ3.4 cmである。形態は、下側縁が124度に開く「八」状を呈し、その頂点の5.1 cm上に径2.1 cmの円孔が穿たれている。側面は平坦面と約100度の角度でやや外方へ開く。内法は推定で28.4 cmである。凸面・凹面の状況については、凸面は平坦面が木口圧痕・ケズリ→ナデ、側面がケズリ、凹面は平坦面が糸切り痕→布目→横縄叩き目→叩き目つぶれ、側面は糸切り痕→布目が認められる。このことから、製作は①側部の形成、凸面：(叩き)・凹面：布目、②凹面：縄叩き(平坦面)・凸面：木口圧痕(平坦面)、③凸面：ケズリ→ナデ・凹面：叩き面のつぶれ(平坦面)の3工程を経ているものと推定され、①を成形、②、③を調整として理解できる。胎土は緻密だが砂粒を比較的多く含み、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。



第23図 面戸瓦実測図



第24図 隅切り瓦実測図



第25図 割斗瓦実測図

第7表 面戸瓦観察表

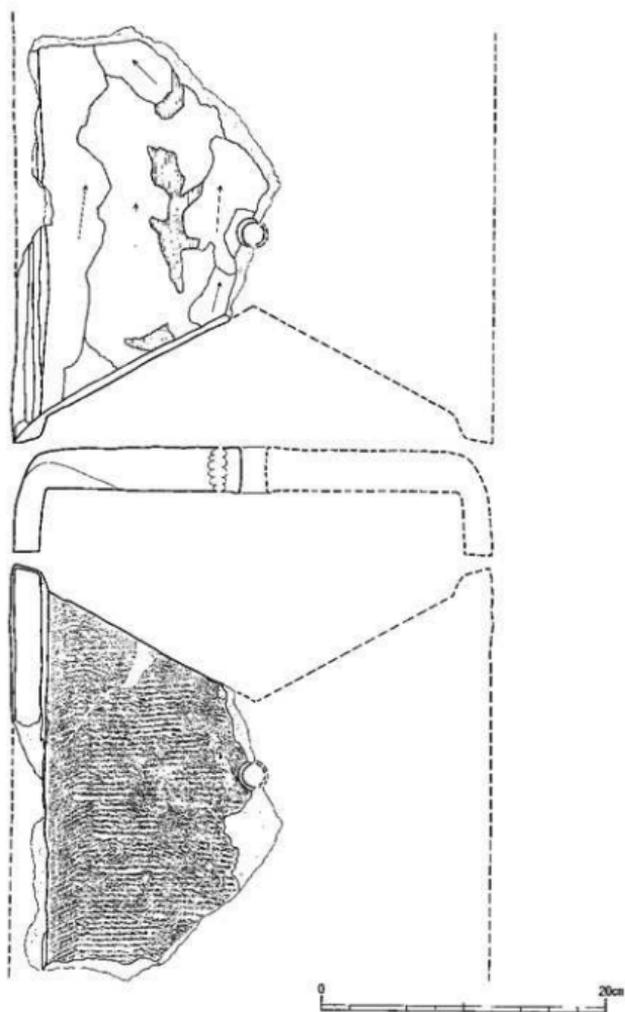
		種 類		地 区・遺跡名		層位	白 面	玄 面	長さ	幅	高さ	厚さ	写真枚数
第2302	面戸瓦1型	A-2 G	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目			25.1	16.5	7.9	1.8	32-1	
第2302	面戸瓦1型	B-4 G	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目			(28.2)	(15.3)	(7.4)	1.8	32-2	
第2304	面戸瓦1型	B-4 G	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目			(25.2)	16.9	7.5	2.1	32-3	
第2304	面戸瓦1型	S K 4	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目				(16.8)	(8.2)	1.8	32-4	
第2304	面戸瓦1型	B-4 G	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目						1.3		
第2304	面戸瓦1型	S K 2	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目						1.3		
第2304	面戸瓦1型	C-1 G	1層	縄切き→ロクロナデ	粘土地肌・布目						1.7		

第8表 隅切り瓦観察表

		種 類		地 区・遺跡名		層位	白 面	玄 面	長さ	幅	高さ	厚さ	写真枚数
第2401	隅切り瓦	A-2 G	1層	ナデ	布目								33-1
第2402	隅切り瓦	S K 2	1層	羽毛目・ナデ	糸切道→布目→ナデ→木目→布目								33-2
第2403	隅切り瓦			地肌→布目→布目	糸切道→布目→ナデ→木目→布目								33-3
第2404	隅切り瓦	C-1 G		羽毛目→布目	木目→布目								1 D 破
第2405	隅切り瓦	A-4 G		地肌→布目→布目	糸切道→布目→ナデ→木目→布目								33-4
第2405	隅切り瓦	C-1 G		地肌→布目→布目	布目→ナデ								1 B 破
第2405	隅切り瓦	C-1 G		地肌→布目	布目→ナデ→木目→布目								1 B 破

第9表 割斗瓦観察表

		種 類		地 区・遺跡名		層位	白 面	玄 面	長さ	幅	高さ	厚さ	写真枚数
第2501	割斗瓦	A-4 G		地肌→布目	布目→ナデ→木目→布目								33-6
第2502	割斗瓦	A-4 G		地肌→布目	布目→ナデ→木目→布目								33-5



観覧表

種別	地区・遺跡名	層位	△	門	山	説明
隅木葺瓦	B-4G		平屋根 側面	木目地直・ケズリ・ナゲ マズリーナダ	平屋根 側面	木目地直・ケズリ・ナゲ マズリーナダ 平屋根 側面 木目地直・ケズリ・ナゲ マズリーナダ 34-1

第26図 隅木葺瓦実測図

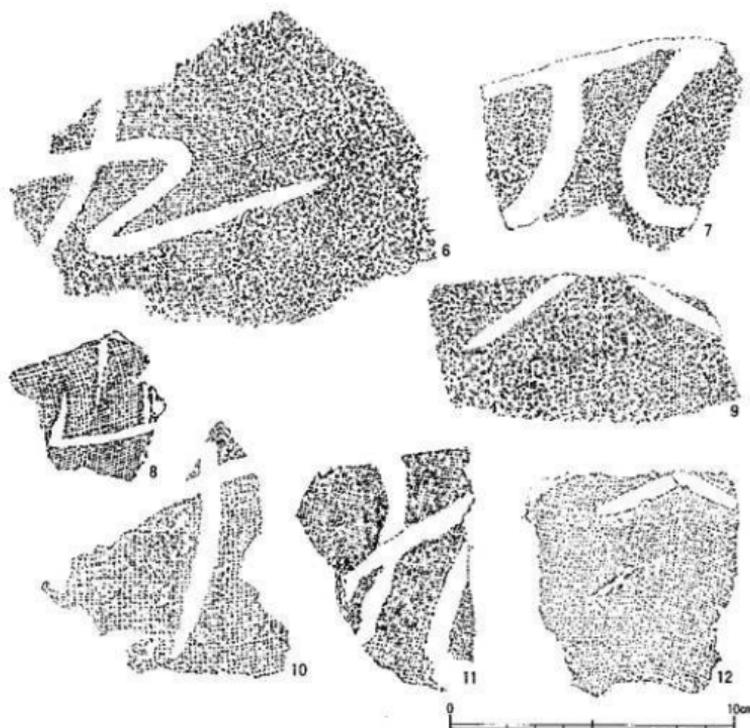
⑥文字・記号瓦：総数54点出土しており、瓦出土総量の0.7%とその数は少ない。判読できたものには文字瓦が多く、記号瓦は1点認められた。これらの表記方法には、(1)刻印によるもの、(2)指先あるいはヘラ状の工具で書いたと考えられるもの（指書き、ヘラ書き）とがみられ、刻印によるものは4点、指書き、ヘラ書きによるものは50点である。全て遺構外から出土している。

刻印瓦：刻印瓦には文字瓦、記号瓦がある。文字瓦では「吉」2点と「大」1点、記号瓦では「㊦」1点が認められた。第27図3は丸瓦玉縁部凹面に刻印されている。平瓦は凸面：縦縄叩き目、凹面：布目（細）、丸瓦は3点とも凸面：ロクロナデ、凹面：布目である。

指書き・ヘラ書き瓦：判読できないものが多く、記号瓦は認められなかった。文字瓦では「九」と判読できるもの（第27図6）とその可能性のあるもの（第27図5・7・10・11）が計5点、「㊦」と判読できるもの1点（第28図9）が出土している。また、これらの指書き・ヘラ書き瓦は平瓦33点、丸瓦17点に認められ（指書き27点、ヘラ書き22点）、全て凹面に表記してある。平瓦は30点が凸面：縦縄叩き目、凹面：布目 or 布目・ナデ（細22・粗8）、2点が凸面：斜め縄叩き目、凹面：布目 or 布目・ナデ（細1、粗1）、1点が凸面：不明、凹面：布目（細）で、それらは平瓦の分類ではIV類・V類にあたる。丸瓦は17点とも凸面：ロクロナデ、凹面：布目で、凸面にはロクロナデに先行する縄叩き目の認められるものが8点ある。

第10表 出土遺物数量表

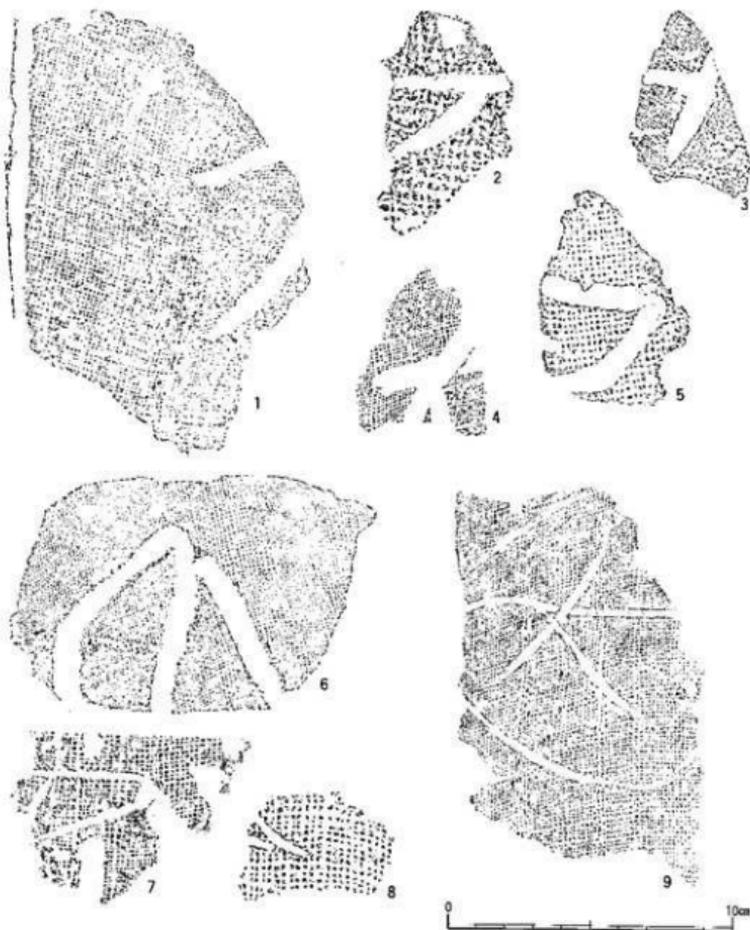
種別	遺構外	SK 1	SK 2	SK 3	SK 4	SX 1	総数	
土器	土師器	6	1	3	0	0	10	
	須恵器	6	0	1	0	0	7	
器	赤焼土器	1	0	0	0	0	1	
瓦	軒丸瓦	32	0	0	0	0	32	
	軒平瓦	36	0	0	0	0	36	
	丸瓦	2520	50	39	12	9	2633	
	平瓦	4539	91	102	16	15	4764	
	面戸瓦	4	1	1	0	1	7	
	隅切り瓦	6	0	1	0	0	7	
	熨斗瓦	2	0	0	0	0	2	
	隅木蓋瓦	1	0	0	0	0	1	
	文字記号瓦	(54)						(54)
	鑑別不明	583	0	0	0	0	0	583
総数	7736	143	147	28	25	4	8083	



観察表

番号	出土状況	窯跡	形状	内容	判	分	発見地
1			丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	印 34-2
2			平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	印 34-3
3	A-1 グリッド		丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	E 34-4
4			丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	印 34-5
5			平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	声 34-6
6			平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	声 34-7
7			丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	声 34-8
8	B-3 グリッド		平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	声 35-1
9			丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	声 34-9
10			平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	声 35-2
11			丸瓦	裏面に「ワ」の文字	瓦目	無	声 35-3
12	B-1 グリッド		平瓦	裏面に「目」の文字	瓦目	無	声 35-4

第27図 文字・記号瓦(1)



観察表

番号	出土状況	破片	種類	内面	外面	分類	発見箇所
1			平瓦	縦線印あり	右目・1大? 「九」	字書	35-5
2	D-1グリット		平瓦	斜め縦線あり	右目-「?」	字書	35-6
3	C-1グリット		平瓦	縦線あり-ロツコッテ	右目-「?」	字書	35-7
4			平瓦	ナダ	右目-「?」	字書	35-8
5			平瓦	縦線印あり	右目-「?」	字書	35-9
6			平瓦	縦線印あり	右目-ナダ・1?」	字書	35-10
7	C-1グリット		平瓦	縦線印あり	右目-「?」	字書	35-11
8	C-1グリット		平瓦	縦線印あり	右目-「?」	字書	35-12
9			平瓦	縦線印あり	右目-「?」	字書	35-13

第28図 文字・記号瓦(2)

4. 考察とまとめ

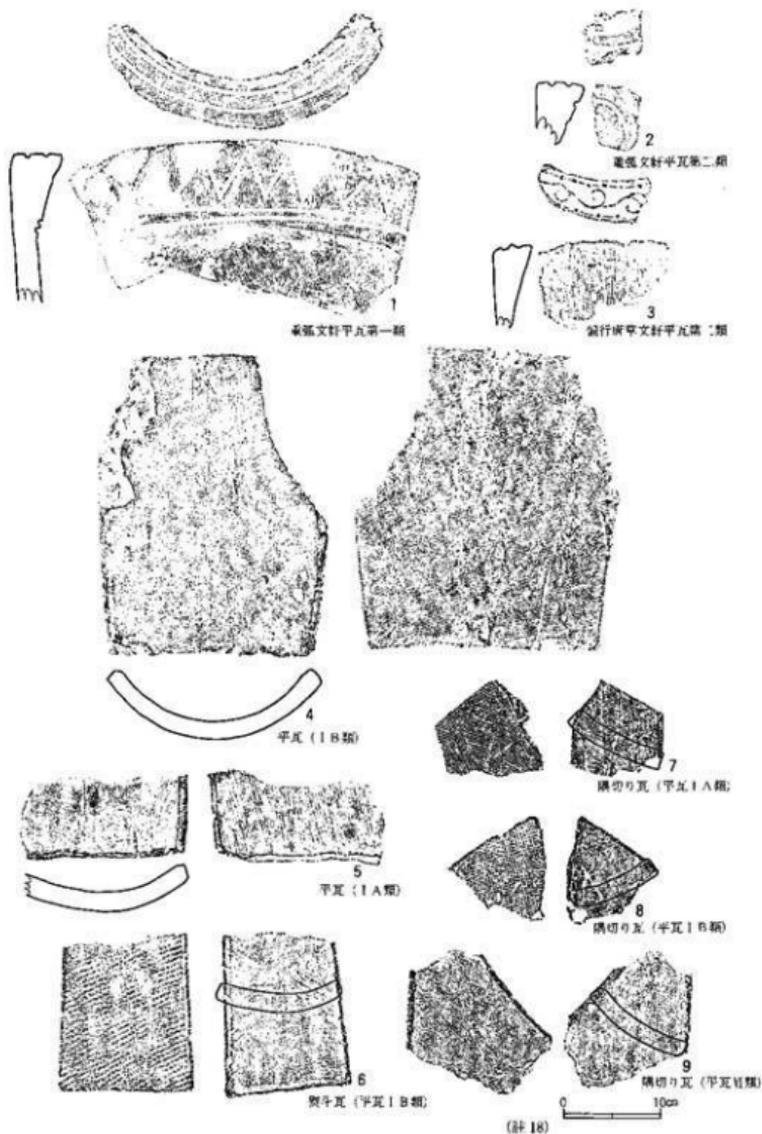
今回の塔跡南地区の調査では土坑5基、性格不明遺構1基が検出されており、それらは出土遺物からSK5を除き、陸奥国分寺に関わる時期のものと考えられる。出土した遺物の総数は8083点でそのほとんどは瓦破片で占められているが、遺構からの出土は極めて少なく、軒丸瓦・軒平瓦は全て遺構外出土であった。

ここでは、これまでの調査成果を含め、平瓦破片の類別によって分けられたA群・B群について、他の瓦とともに考えてみたい。

A群・B群に属する平瓦の存在は、陸奥国分寺跡において初めて行なわれた1955～59年の調査及びそれ以降の調査においても知られていたが、今回の調査ではA群（I類・III類・VI類）とB群（IV類・V類）がほぼ同率で存在していることが明らかとなった。A群・B群の前後関係については、SK1・SK2出土平瓦組成と、遺構外出土全平瓦組成との関連からA群がB群に先行するとともに、遺構外全組成に占めるA群の比率が高いことから、A群には陸奥国分寺創建期の平瓦である可能性が考えられる。

またこの2群と道具瓦との関連についてであるが、道具瓦は今回の調査で面戸瓦・隅切り瓦・製斗瓦・隅木蓋瓦の4種類、17点が出土している。そのうち隅切り瓦7点、製斗瓦2点は全てI類・VI類の製作工程に基づいて作られており、南大門東脇築地跡（1983年調査）から出土した隅切り瓦1点（VI類）、製斗瓦1点（I B類）についても同様である。隅木蓋瓦も、その製作には平瓦I類のように3工程が推定され、門面には調整痕として平瓦I B類に認められる横縄叩き目が残されている。面戸瓦も、出土平瓦がA群に限られるSK1及びSK2から面戸瓦I類がそれぞれ1点ずつ出土しており、A群にはこれらの道具瓦が伴うものと考えられる。中でも隅木蓋瓦の出土例は他の遺跡でも少なく、県内では多賀城跡で報告されているが、類似する例は藤原宮跡^(註8)・川原寺跡^(註9)・薬師寺などにおいて知られる。この隅木蓋瓦の規模は、内法での幅が推定28.4cmと広く、大規模な建築物に使用されていたものと推定され、出土位置（B-4グリット）から塔に益かかれていた可能性も考えられる^(註10)。また、B群の製作工程に基づく隅切り瓦・製斗瓦は今のところ報告されていない。丸瓦についてはSK1・SK2出土例から粘土紙巻き作りによる玉縁付のものがA群に伴うと考えられる。

陸奥国分寺創建期の軒丸瓦・軒平瓦については、既に伊東信雄により重弁連華文軒丸瓦第一類～第六類、重弧文軒平瓦第一類・第二類、偏行唐草文軒平瓦第一類～第五類、山形文軒平瓦^(註1)などが広い意味での創建期のものと推定されており、工藤雅樹によっても両者の組成比から同様のことが示されている^(註10)。この中で重弧文軒平瓦第一類・第二類には、これまでの出土例から、顎面に調整痕として平行叩き目のあるものがみられ、偏行唐草文軒平瓦第一類には前述のように平瓦部凸面に稲妻叩き目が残されているものもあり、平瓦I A類・I D類との関連性も考え



第29図 陸奥国分尼寺跡出土遺物(1988年調査)

られる。

次にA群と陸奥国分尼寺跡出土瓦との関連について触れておきたい。国分尼寺跡においてもA群・B群に属する平瓦の存在は1964年以降行なわれてきた調査で知られており、1986年の調査では出土した平瓦の約半をI A類が占めること、I Aa類とI Ab類の両者の存在も確認されている。また、1988年の調査では遺構は検出されなかったが、軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦とともにA・B両群の平瓦が出土しており(第29図)、A群の平瓦としてはI A類・I B類・I D類が認められる。I B類の平瓦には唯一完形品の規模を復原できるものがあり、長さ36.6cm、狭端幅27.7cm、広端幅推定29.5cm、凹面側の幅と深さの比が約4:1の弧状をなす。道具瓦は隅切り瓦3点、製斗瓦4点が出土しており、隅切り瓦はI A類・I B類・VI類、製斗瓦は全てI B類に基づいて製作されている。道具瓦は1986年の調査でも面戸瓦1点、隅切り瓦1点(I B類)が出土している。このことは、国分尼寺跡においても、国分寺A群の平瓦、A群の製作工程に基づく隅切り瓦・製斗瓦が存在していることを示しており、面戸瓦を含め、これらは創建期の平瓦・道具瓦として位置付けられる可能性がある。丸瓦については、これまでの報告例では全て粘土紐巻き作りの玉縁付のものである。また国分尼寺創建期の軒丸瓦・軒平瓦は国分寺とほぼ同じであることが考えられており、軒平瓦の調整痕については、重弧文軒平瓦第一類・第二類と偏行唐草文軒平瓦第二類に平行叩き目を顎面に残すものがあるほか、1988年の調査では、顎面と平瓦部凸面に平行叩き目がみられる重弧文軒平瓦第一類が1点出土している(第29図1)。顎面は国分尼寺跡東北東方約400mに位置する志波遺跡からも出土しており、平瓦I A類との関連性も考えられる。

このように、陸奥国分寺・国分尼寺創建期の軒丸瓦・軒平瓦の共通性は、従来指摘されてきているが、今回の調査により、丸瓦・平瓦・道具瓦においても共通する可能性が示された。しかし、軒平瓦の中で偏行唐草文は、これまでの報告例からみると、国分寺では左行する第一類が、国分尼寺では右行する第二類が多く、異なる点もある。また、両寺創建期の平瓦の主体をなすと考えられるA群I類・VI類の窯跡については明確でないが、I A類は仙台市深沢中窯跡第二次調査において、多賀城II期の窯跡である第4遺構の崩落壁から1点、地点は不明であるが施設の一部に使用されたと推定されるものが1点の計2点が出土している例が知られるほか、I D類が仙台市神明社東南地区窯跡で採集されている例があるにすぎない。今後、国分寺、国分尼寺へのI類・VI類を含めたA群の供給を、窯跡等を通して究明していく必要がある。

最後に、A群とB群の時期について多賀城跡との関連を考えておきたい。【多賀城跡(政)跡】では、平瓦の分類が行なわれ、主に製作工程からI類:桶巻き作り、II類:一枚作り到大別され、7種類に細別されている。このうちI類(A~D)とII A類の5種類が多賀城I期、II B類がII・III期、II C類がIV期に位置付けられている。今回の国分寺の平瓦分類は破片資料を

対象としたことから多賀城跡の分類と同列には扱えない面もあるが、その対応関係は第11表に示され、国分寺Ⅰ類・Ⅵ類に対応する平瓦は分類の対象には含まれていない。

国分寺A群の主体となるⅠ類は、製作に3工程を経ており、2次叩き目にさらにナアを施す比率の高いⅠA類もあることから多賀城ⅡB類とは異なる。多賀城跡における平瓦の製作は、桶巻き作り(Ⅰ類)から一枚作り(Ⅱ類)へ、調整技術からみた場合、凹凸両面に2工程を経るものを含むⅠ類から、1工程のⅡB類、調整工程のないⅡC類への変遷が示されている。国分寺Ⅰ類は一枚作りにより製作されており、調整に2工程を経ていることから、多賀城ⅡB類に先行することが推定される。このことから、国分寺A群は多賀城Ⅰ類に後続し、多賀城Ⅰ期の中に位置付けられる可能性が高い。

国分寺B群はそれに後続し、多賀城Ⅱ～Ⅳ期の中に位置付けられる。

尚、本稿を草するにあたり、高野方宏氏には多忙にもかかわらず、幾度となく暖かい教示をいただいた。記して感謝したい。

第11表 平瓦類別対応表

陸奥国分寺跡	多賀城跡
	Ⅱ類……………ⅠA類(Ⅰ期)
A群	Ⅰ類……………
	Ⅵ類……………
B群	Ⅲ類……………ⅡA類(Ⅰ期)
	Ⅳ類……………ⅡB類(Ⅱ期・Ⅲ期)
	Ⅴ類……………ⅡC類(Ⅳ期)

註

1. 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 河北文化事業団 1961『陸奥国分寺跡』
2. 青沼一民 佐藤甲二 1984『史跡陸奥国分寺跡一南大門跡東脇築地跡』仙台市文化財調査報告書第63集
3. 加藤道男 1980『木の下遺跡(陸奥国分寺跡北東部)』『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集
4. 工藤哲司 1981『史跡陸奥国分寺跡・東門跡』仙台市文化財調査報告書第27集
5. 及川 格 中富 洋 1988『陸奥国分寺跡』『仙台平野の遺跡群Ⅶ』仙台市文化財調査報告書第111集
6. 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所 1980『多賀城跡 政庁跡図録編』
7. 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡本文編』
8. 奈良国立文化財研究所 1976『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』奈良国立文化財研究所学報第27冊
9. 奈良国立文化財研究所 1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第9冊
10. 奈良国立博物館 朝日新聞社 1961『天平の地宝』
11. 奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊
12. 隅木蓋瓦については、古川雅清氏に文献等、種々の教示をいただいた。
13. 平城宮跡第一次大極殿の隅木蓋瓦、大宮大寺跡の隅木節り金具について鈴木富古氏、佐川正敏氏に教示をいただいた。
14. 工藤雅樹 1965『陸奥国分寺出土の空相花文蓋瓦の製作年代について』『歴史考古』第13号

15. 伊東信雄 工藤雅樹 1969「陸奥国分尼寺跡調査報告書」「史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第4集
16. 斎野裕彦 渡辺 誠 1985「陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群IV』仙台市文化財調査報告書第75集
17. 松本清一 1987「史跡陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群VI』仙台市文化財調査報告書第97集
18. 主浜光朗 1988「陸奥国分尼寺跡」『仙台平野の遺跡群III』仙台市文化財調査報告書第125集
19. 岩淵康治 1973「五本松竈跡発掘調査報告書」仙台市文化財報告書第6集
20. 渡辺泰伸他 1988「仙台市蟹沢中竈跡第2次調査報告」古竈跡研究報告第8冊 陸奥国宮竈跡群V
21. 内藤政臣 1964「仙台市台ノ原・小田原瓦竈址群と出土の古瓦」『歴史考古』第11号
22. 多賀城跡では、II B 型のうち、a 2 タイプの一部が I 期に少数例存在することが示されているが、今回の国分寺の分類では対象資料が破片であることから、a 2 タイプの識別は困難であったため、II 期・III 期の II B 型に対応させた。
23. 多賀城跡における国分寺平瓦 I B 型の存在については高野芳宏氏の教示をいただいた。また多賀城跡では軒平瓦の平瓦部に稲妻叩き目のあるものが知られている。

写 真 图 版

写真1
調査前風景
(西方より)



写真2
調査区全景(1)
(東方より)



写真3
調査区全景(2)
(北方より)





写真4
基本層序
(A-4G、北壁)

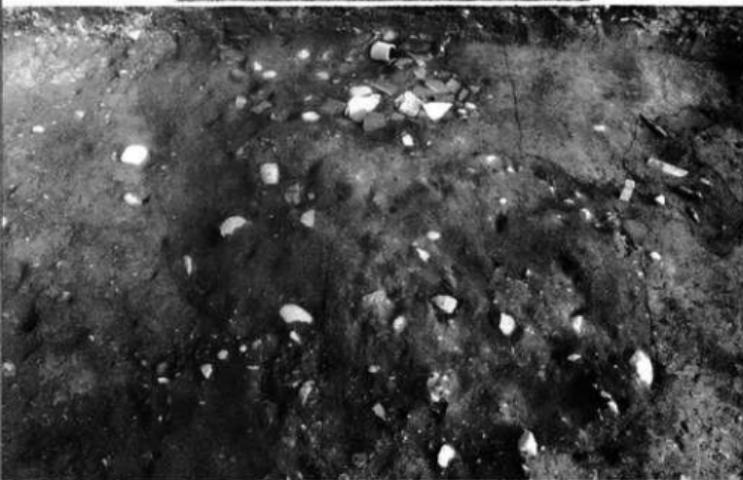


写真5
SK1、SK2
確認プラン
(西方より)



写真6
SK1全景
(西方より)

写真7
SK 1瓦出土状況
(西方より)



写真8
SK 1セクション
C-C'
(北方より)



写真9
SK 2全景
(西方より)





写真10
SK 2 セクション
C-C'
(北方より)



写真11
SK 3 確認
プラン
(北方より)



写真12
SK 3 全景
(北方より)

写真13
SK 3 セクション
(南方より)



写真14
SK 4 確認プラン
(北方より)



写真15
SK 4 全景
(北方より)



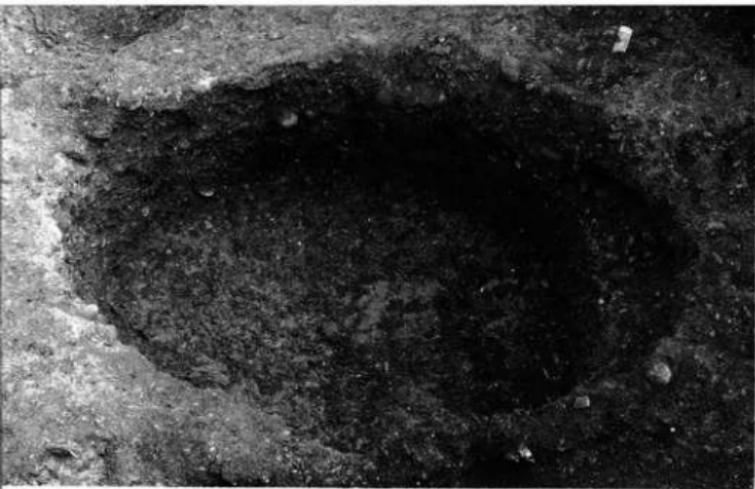


写真16
SK 5 全景
(東方より)

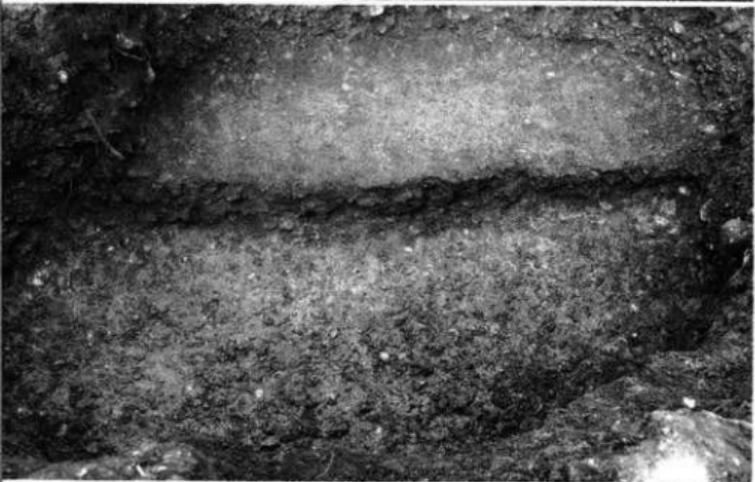


写真17
SK 5 セクション
(東方より)



写真18
SX 1 確認プラン
(北方より)

写真19

S X 1 全景
(北方より)



写真20

S X 1 セクション
B-B'
(西方より)



写真21

作業風景
(南方より)



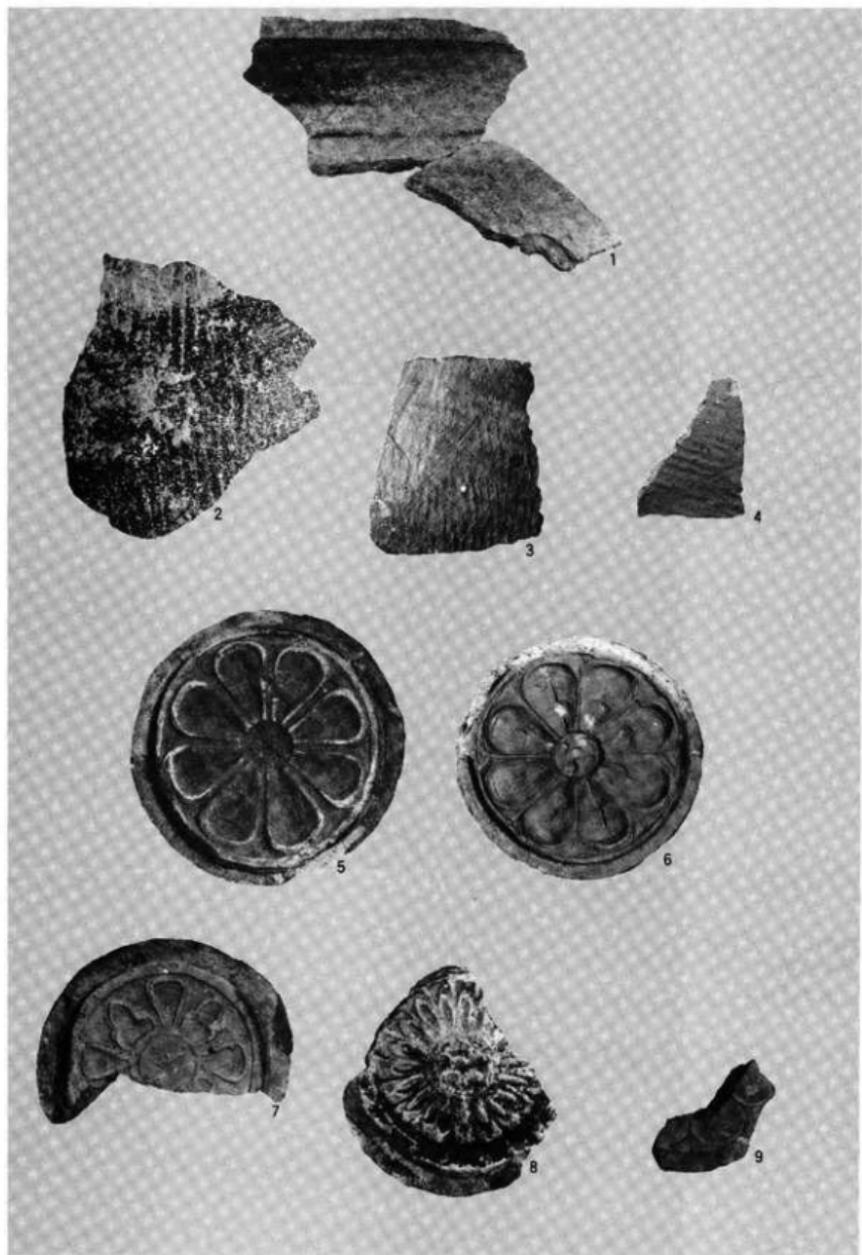


写真22 須惠器・軒丸瓦

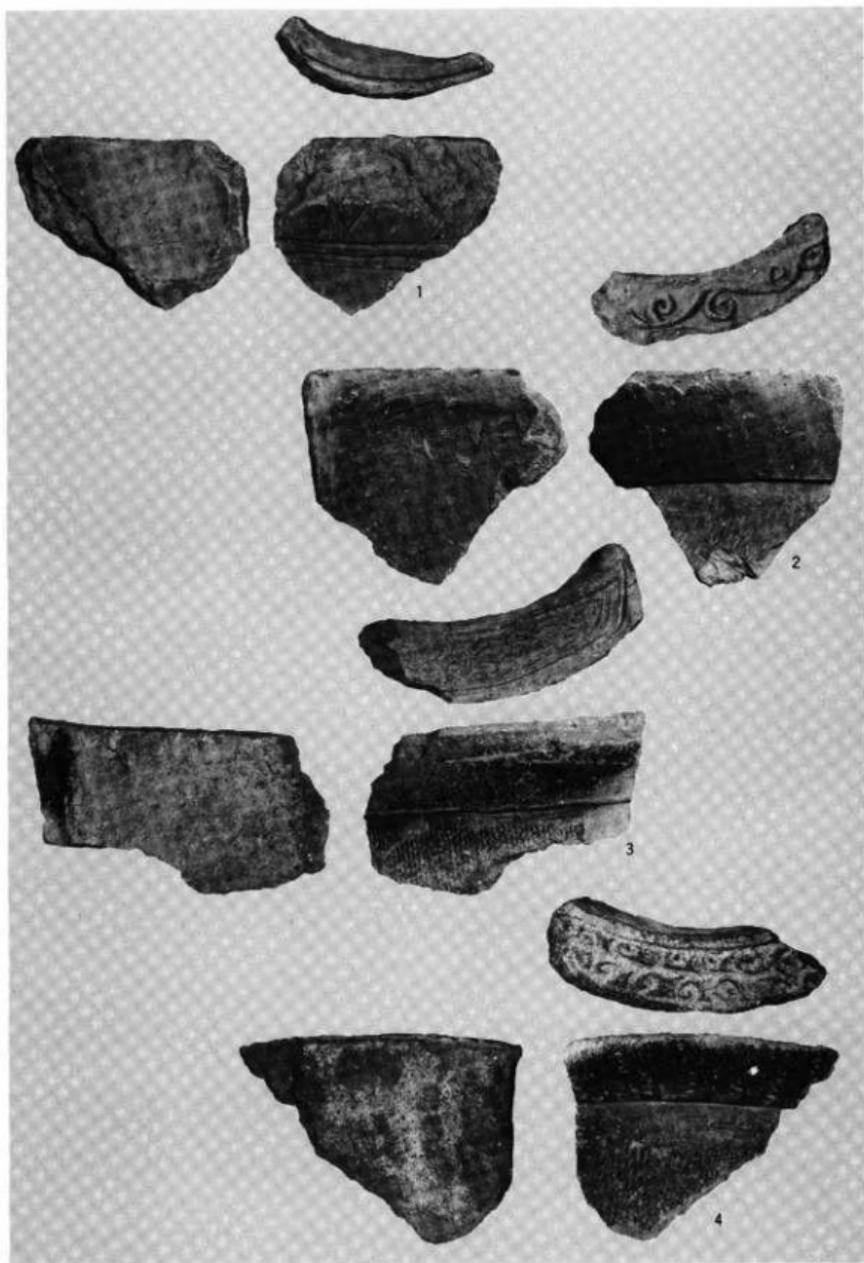


写真23 軒平瓦(1)

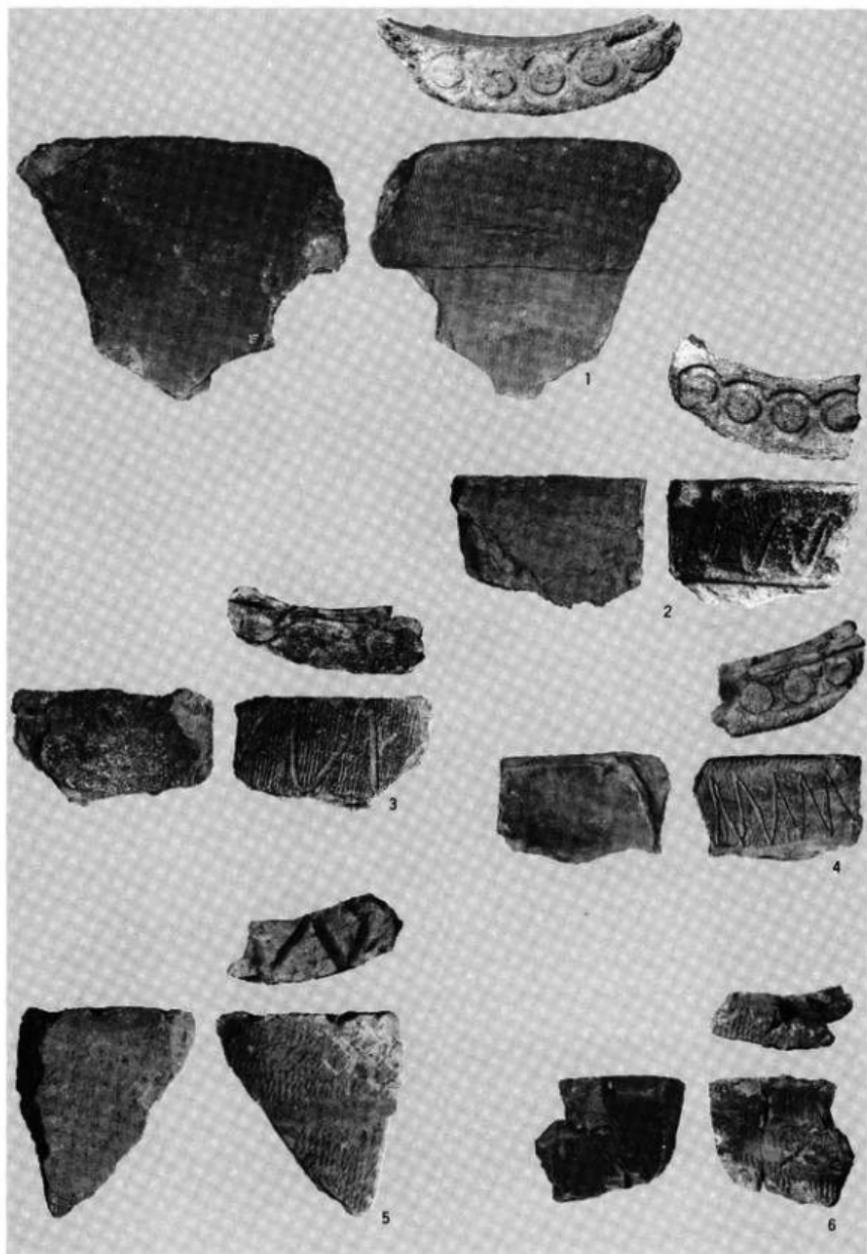


写真24 軒平瓦(2)

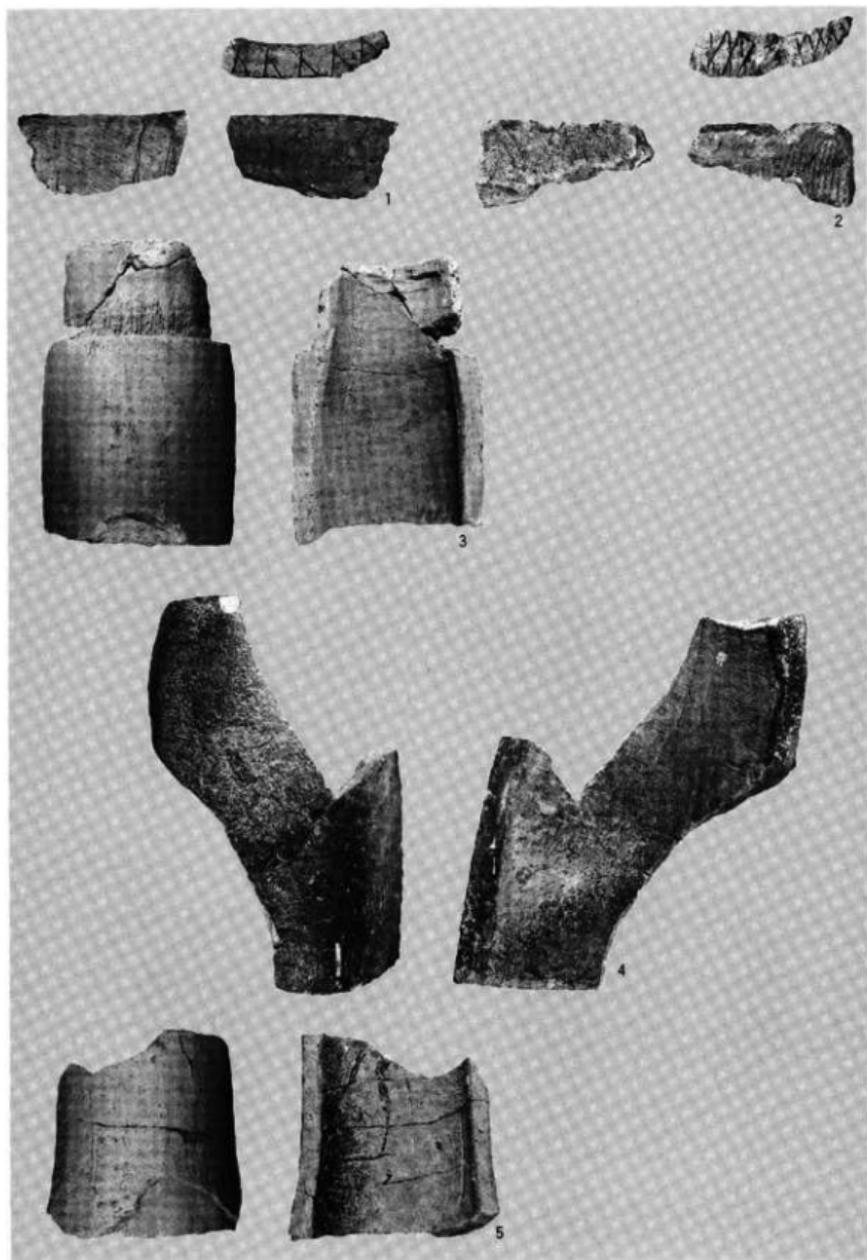


写真25 軒平瓦(3)・丸瓦

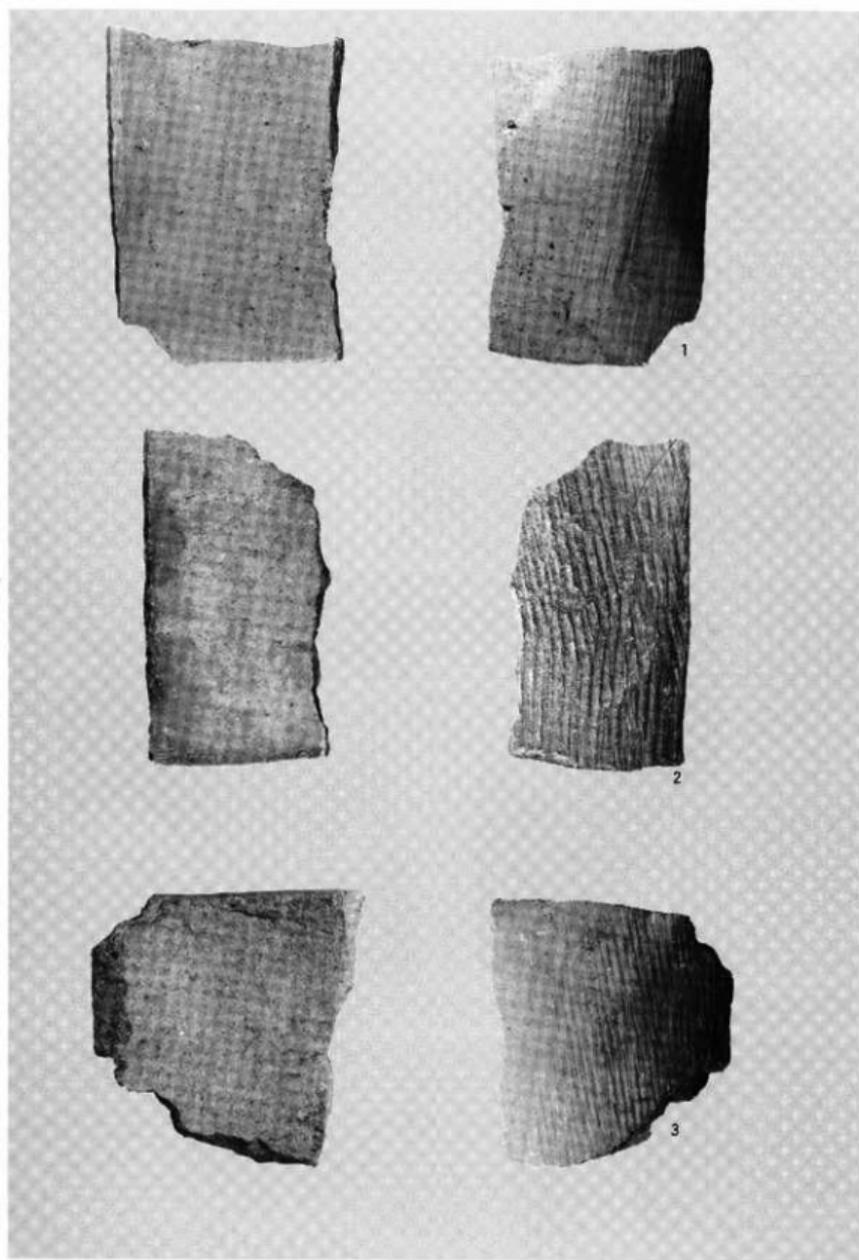


写真26 平 瓦 (1)



写真27 平 瓦 (2)

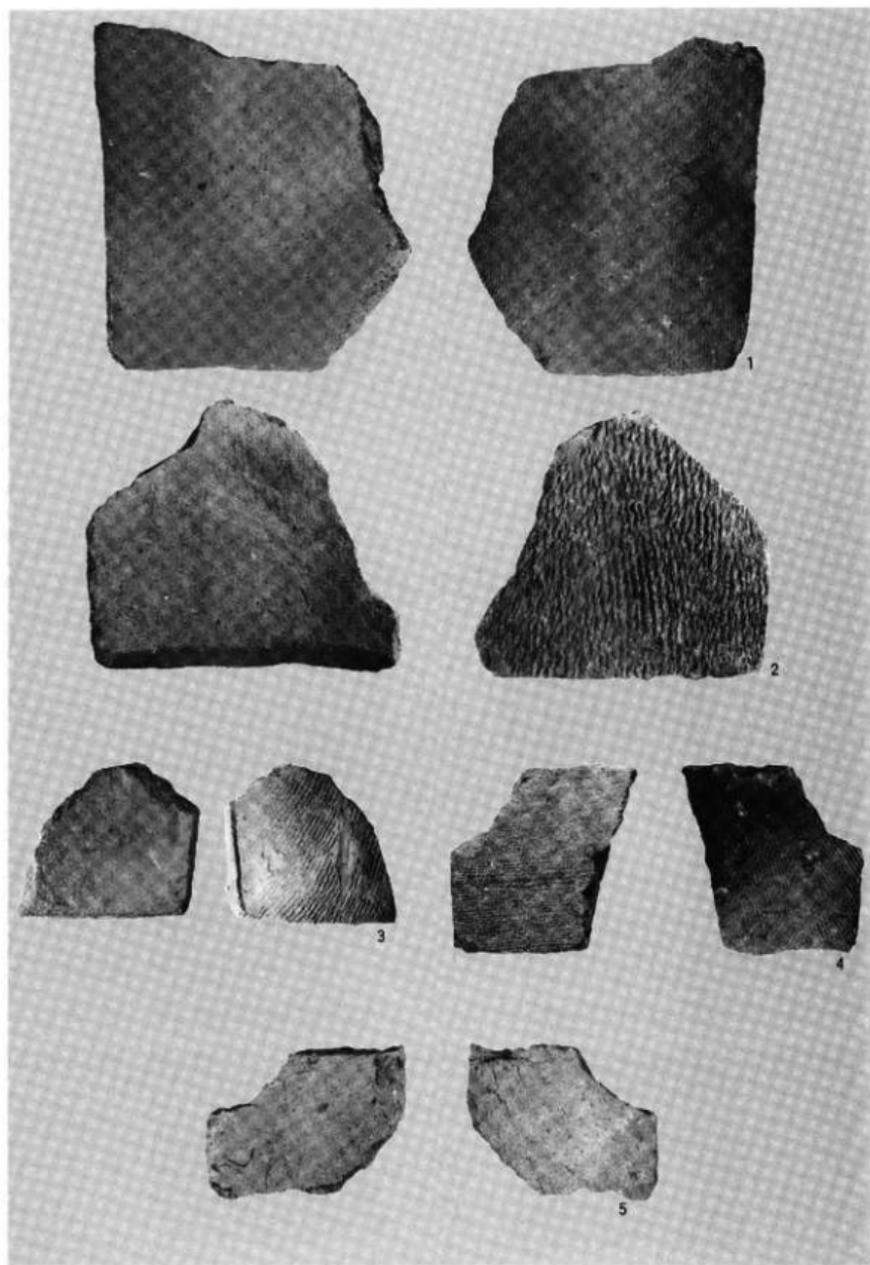


写真28 平瓦(3)

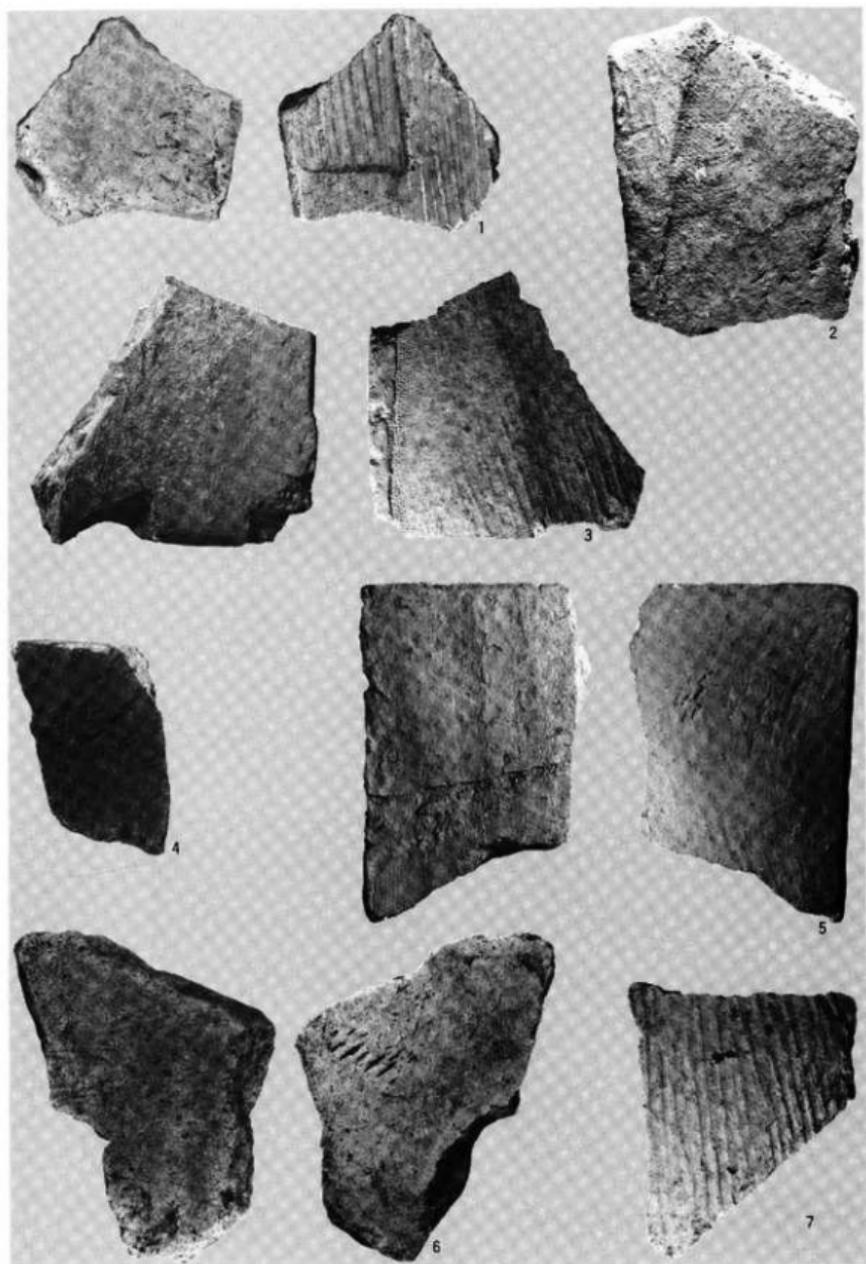


写真29 平 瓦 (4)

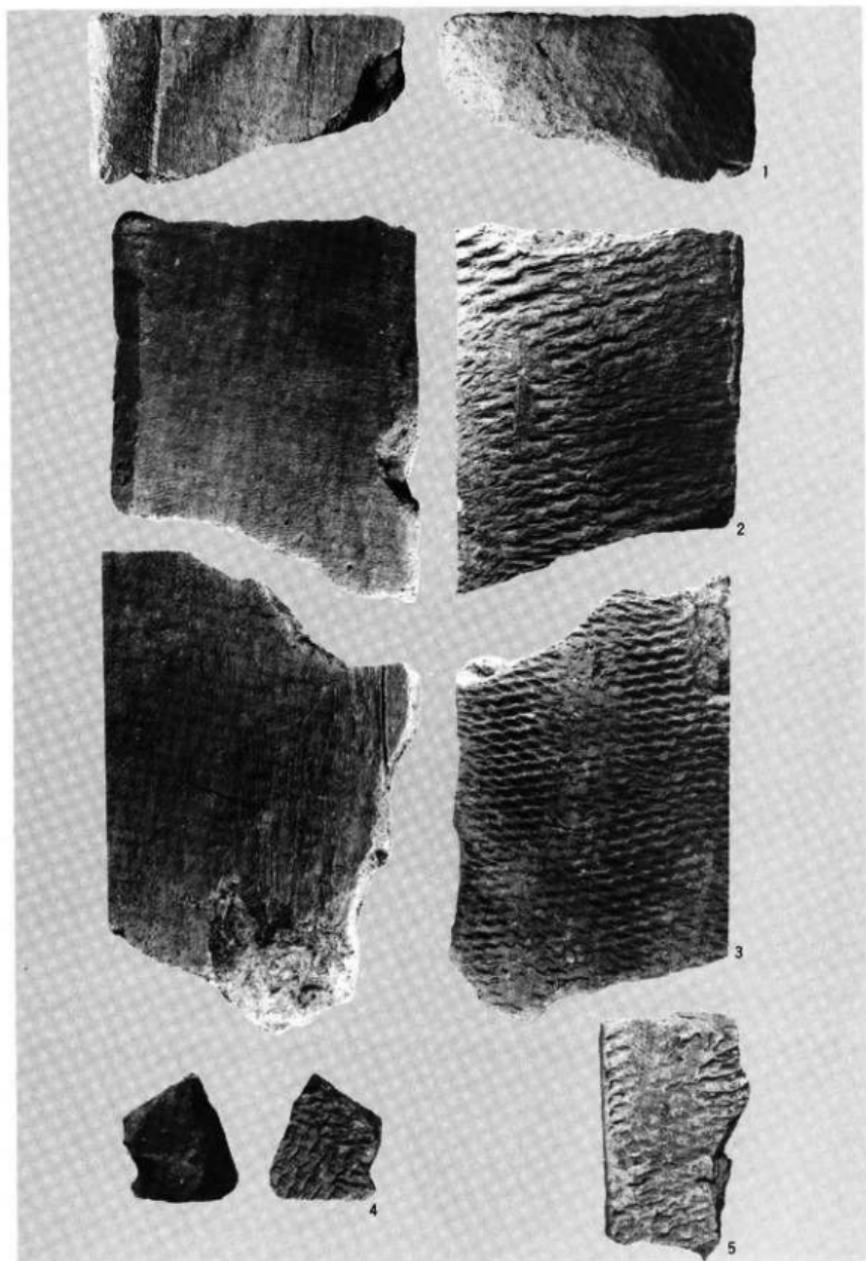


写真30 平瓦(5)

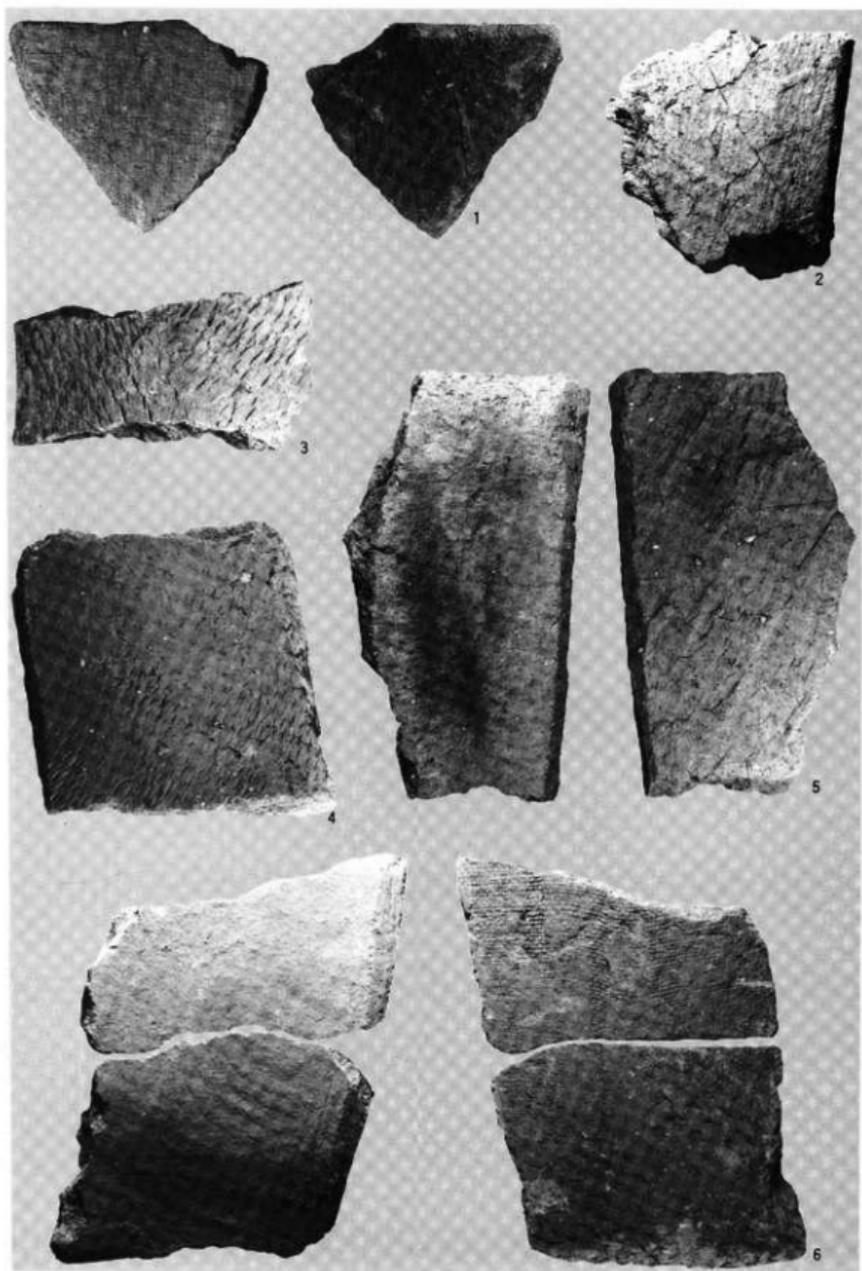


写真31 平瓦(6)

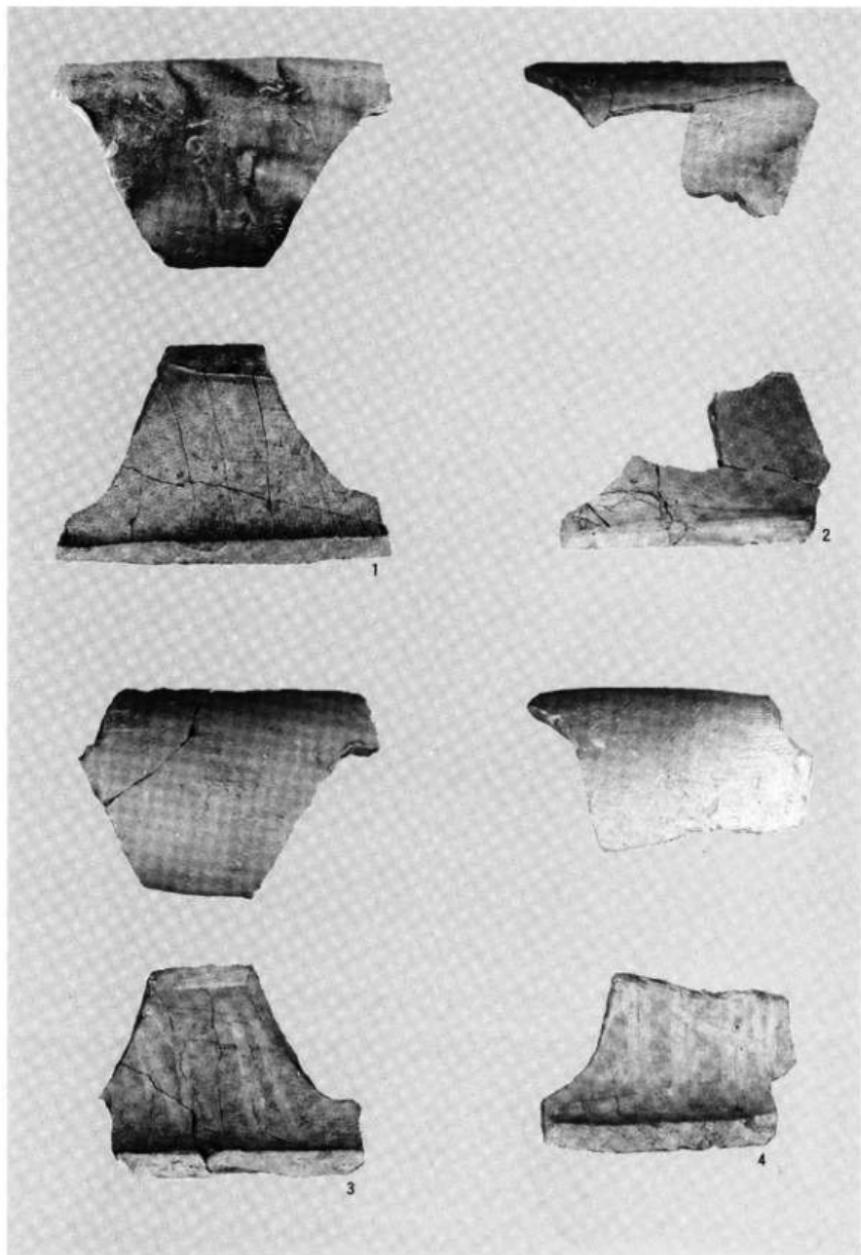


写真32 面戸瓦

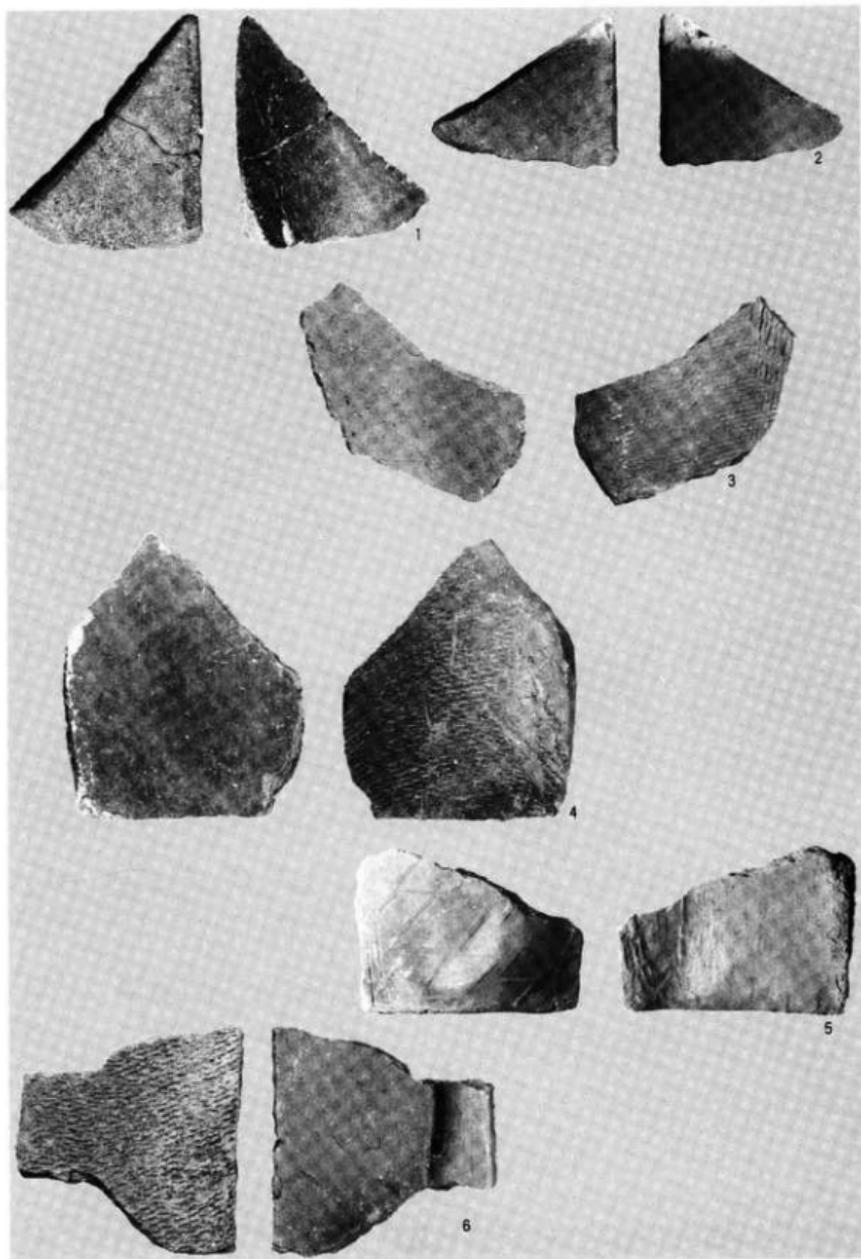


写真33 隅切り瓦・製斗瓦

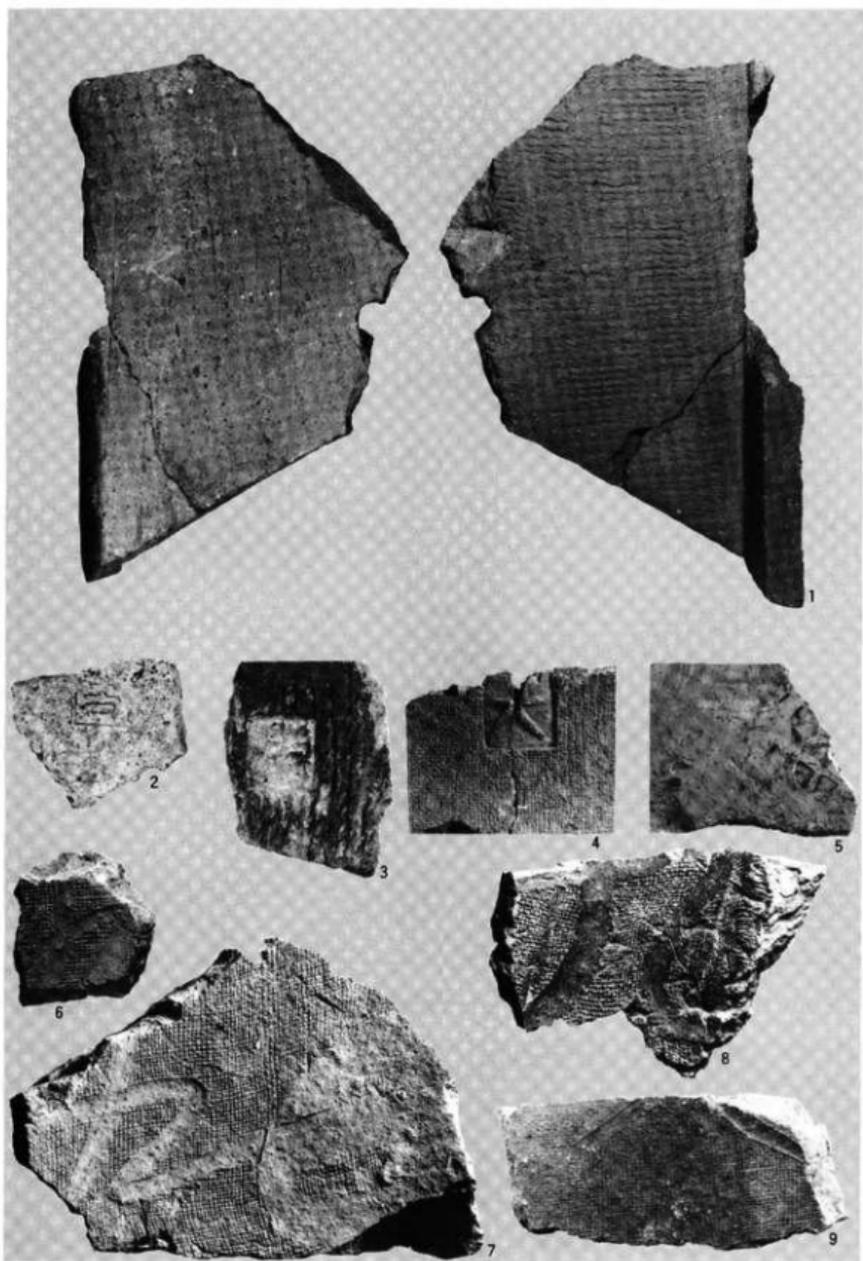


写真34 隅木董瓦・文字記号瓦(1)

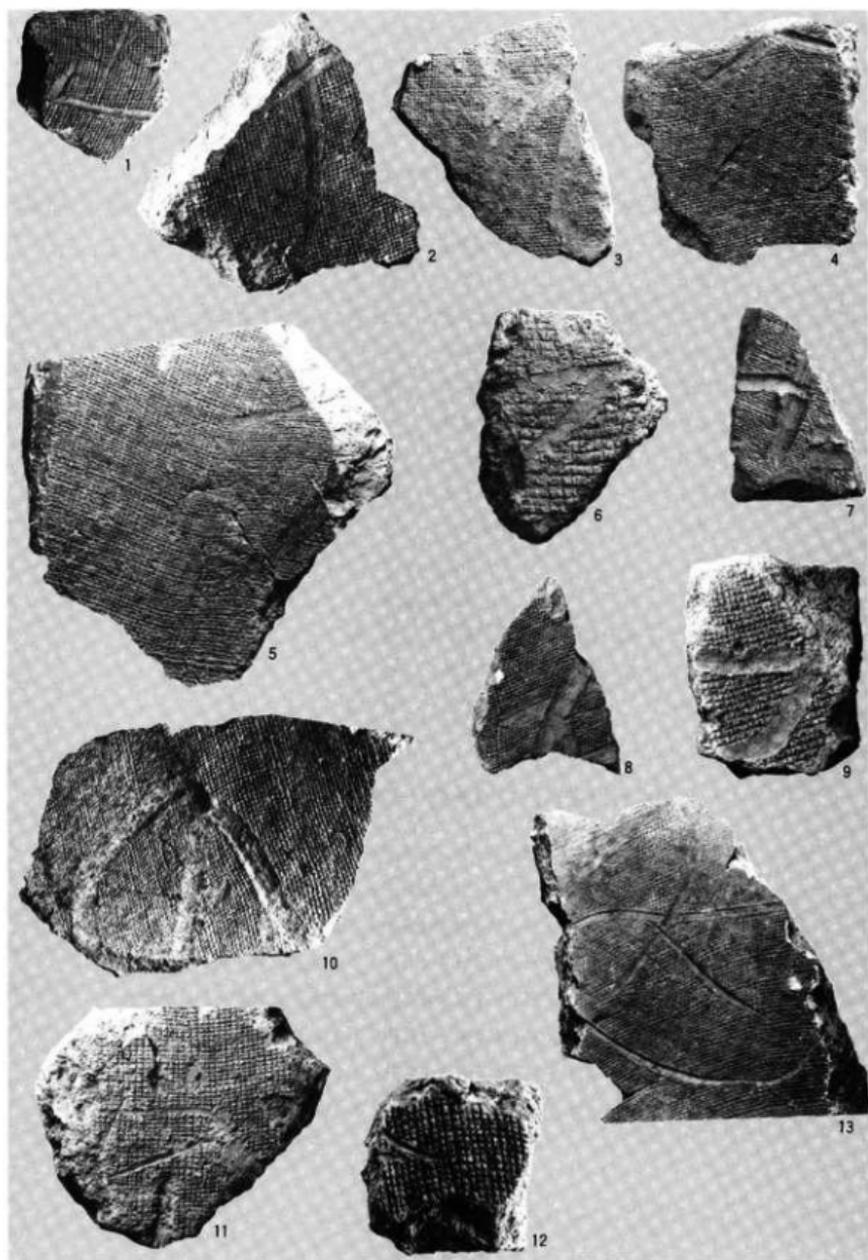


写真35 文字記号瓦 (2)

文化財課職員録

課長	早坂春一				
管理係		調査第一係			
係長	猪田義幸	係長	佐藤隆	主事	佐藤洋
主事	白幡靖子	主任	田中則和	◇	金森安孝
◇	山口宏	教諭	太田昭夫	◇	佐藤甲二
◇	佐藤良文	主任	篠原信彦	教諭	小川淳一
◇	高橋三也	◇	木村浩二	主事	渡部弘美
		主事	吉岡恭平	◇	上藤哲司
		教諭	橋本光一	◇	主浜光朗
		主事	斎野裕彦	◇	長島榮一
		教諭	高倉祐一	◇	工藤信一郎
		主事	大江美智代	◇	荒井格
				◇	中富洋
		調査第二係		◇	平間亮輔
		係長	加藤正範	教諭	渡辺雄二
		主任	熊谷幹男	主事	佐藤淳
		教諭	佐藤好一	◇	渡辺紀

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—(昭和57年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書—(昭和58年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書—(昭和59年3月)
- 第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ—昭和59年度発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ—昭和60年度発掘調査報告書—(昭和61年3月)
- 第97集 仙台平野の遺跡群Ⅵ—昭和61年度発掘調査報告書—(昭和62年3月)
- 第111集 仙台平野の遺跡群Ⅶ—昭和62年度発掘調査報告書—(昭和63年3月)
- 第125集 仙台平野の遺跡群Ⅷ—昭和63年度発掘調査報告書—(昭和64年3月)

仙台市文化財調査報告書第134集

仙台平野の遺跡群IX

平成2年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区四分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 ㈱東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

